秋田県文化財調査報告書第184集

上岱Ⅰ遺跡発掘調査報告書

―― 国道105号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査 ――

1989・3

秋田県教育委員会

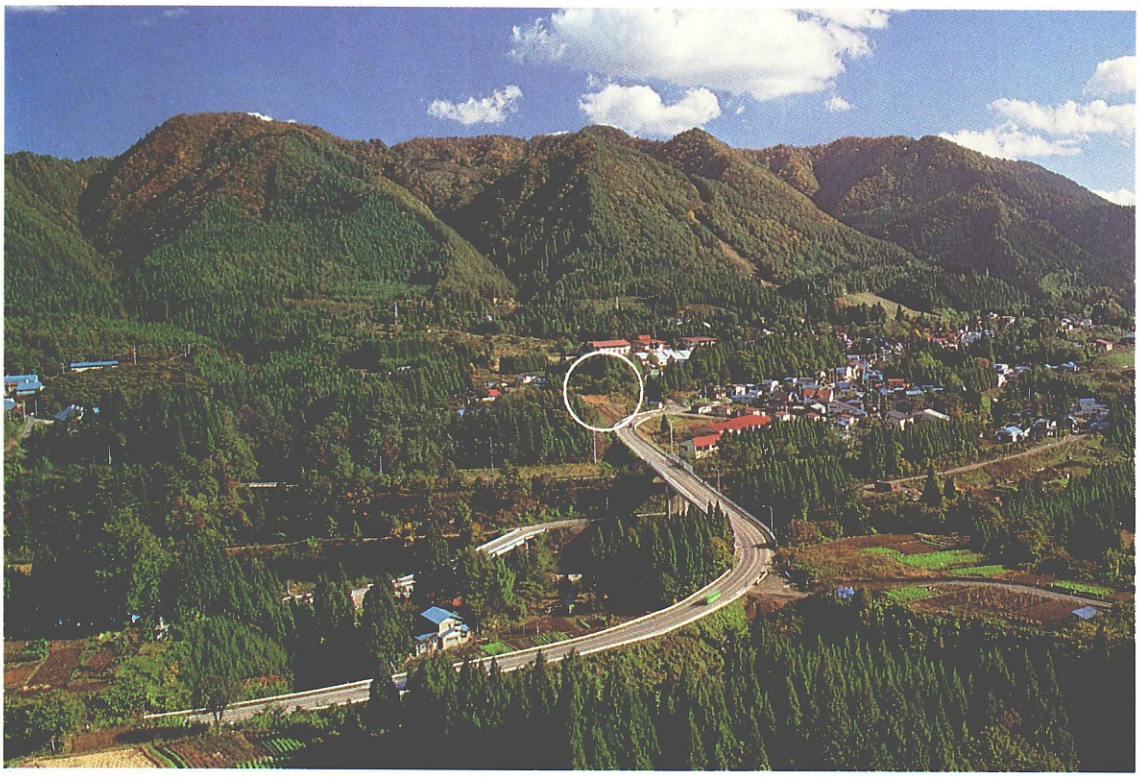
上岱Ⅰ遺跡発掘調査報告書

―― 国道105号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査 ――

1989・3

秋田県教育委員会

1　遺跡遠景（西から）



2　遺跡遠景（北から）

1　SI01竪穴住居跡（南東から）

2　SI01竪穴住居跡複式炉（北西から）

1　調査区南部（北から）

2　SI01・06竪穴住居跡（東から）

1　SI14竪穴住居跡と土坑（南から）

2　調査区北部の竪穴住居跡と土坑（南から）

1　調査区北部の竪穴住居跡と土坑（北から）

2　SK38土坑（西から）

序

秋田県には先人の残した多くの文化遺産が残されています。これら貴重な文化遺産は現代人の責任で保護し、未来に継承していくべきであります。

このほど秋田県土木部により国道105号改良工事が計画され、路線内に上岱Ⅰ遺跡が存在することが判明しましたので、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代の竪穴住居跡や土坑が多数検出され、阿仁町では初めての大きな成果を上げることができました。

本報告書は、この調査記録をまとめたものでありますが、県民各位の文化財に対する御理解と歴史研究の上で、いささかでも役立てば幸いです。

最後に、秋田県土木部北秋田土木事務所、阿仁町教育委員会、地域住民の皆様をはじめ調査にあたり御指導、御協力下さった多くの方々に対し、厚く御礼申し上げます。

平成元年３月25日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1　本書は、国道105号改良工事に係る上岱Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書の執筆は、文化財主事児玉準が行った。

3　本書に掲載した地形図は国土地理院発行２万５千分の１『阿仁合』『阿仁前田』図幅及び北秋田土木事務所提供の１千分の１地形図である。

4　土色の表記は農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

5　放射性炭素年代測定は学習院大学年代測定室に依頼した。

6　遺構番号は、その種類ごとに略号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。遺構略号は竪穴住居跡がＳＩ、土坑がＳＫである。

目　　次

序
例言
第１章　はじめに …… 1
　第１節　発掘調査に至るまで …… 1
　第２節　調査の組織と構成 …… 2
第２章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　発掘調査の概要 …… 4
　第１節　遺跡の概観 …… 4
　第２節　調査の方法 …… 4
　第３節　調査経過 …… 6
第４章　調査の記録 …… 8
　第１節　検出遺構と遺物 …… 8
　第２節　遺構外の出土遺物 ……30
第５章　自然科学的分析 ……36
　第１節　放射性炭素年代測定 ……36
第６章　まとめ ……37

挿図目次

第１図　上岱Ⅰ遺跡周辺地形遺跡図 …… 3
第２図　遺跡周辺地形・グリッド配置図 …… 5
第３図　遺構配置図 …… 7
第４図　ＳＩ01竪穴住居跡 …… 9
第５図　ＳＩ01竪穴住居跡炉 ……10
第６図　ＳＩ02竪穴住居跡 ……11
第７図　ＳＩ03竪穴住居跡 ……13
第８図　ＳＩ06・07竪穴住居跡 ……13
第９図　ＳＩ09竪穴住居跡 ……14
第10図　ＳＩ10・11竪穴住居跡 ……16

第11図　ＳＩ12･13･15･16･20竪穴住居跡 ……18
第12図　ＳＩ18竪穴住居跡・ＳＫ40土坑 ……20
第13図　ＳＩ14･17･19竪穴住居跡 ……21
第14図　ＳＩ21竪穴住居跡 ……22
第15図　ＳＩ22竪穴住居跡 ……23
第16図　ＳＫ30～36･41･48土坑 ……24
第17図　ＳＫ37～39･43･44土坑 ……27
第18図　ＳＫ42･45~47･49･50土坑 ……29
第19図　遺物（１） ……31
第20図　遺物（２） ……32
第21図　遺物（３） ……33
第22図　遺物（４） ……34
第23図　遺物（５） ……35

図版目次

巻首図版１　１　遺跡遠景　２　遺跡遠景
巻首図版２　１　ＳＩ01竪穴住居跡　２　ＳＩ01竪穴住居跡複式炉
巻首図版３　１　調査区南部　２　ＳＩ01・06竪穴住居跡
巻首図版４　１　ＳＩ14竪穴住居跡と土坑　２　調査区北部の竪穴住居跡と土坑
巻首図版５　１　調査区北部の竪穴住居跡と土坑　２　ＳＫ38土坑
図版１　遺跡　１　調査前の状況　２　ＳＩ01竪穴住居跡　３　ＳＩ01竪穴住居跡複式炉
図版２　遺跡　１　ＳＩ01複式炉埋設土器　２　ＳＩ01・02・03竪穴住居跡
３　ＳＩ02竪穴住居跡炉埋設土器
図版３　遺跡　１　ＳＩ03竪穴住居跡　２　調査区南部　３　調査区北部
図版４　遺跡　１・２　調査区北部　３　ＳＩ14竪穴住居跡　４　ＳＩ14竪穴住居跡炉
図版５　遺跡　１　ＳＩ13竪穴住居跡石囲炉　２　ＳＩ18竪穴住居跡石囲炉
３　ＳＩ22竪穴住居跡
図版６　遺跡　１　ＳＩ01・06・22竪穴住居跡　２　ＳＫ38土坑　３　ＳＫ39土坑
図版７　遺跡　１　ＳＫ40土坑　２　ＳＫ42・45土坑　３　調査風景
図版８　遺物
～
図版11

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

国道105号は県北の鷹巣町から大曲市を経て内陸部を縦貫し、本荘市へ至る延長約160kmの道路である。阿仁町中心部では商店街や住宅地を通り道幅が狭く、急坂、カーブがあって交通には支障をきたしており、県土木部ではこの解消のため、町中心部を東に迂回するバイパスを計画して工事を進めてきた。

上岱Ⅰ遺跡は昭和51年発行の『秋田県遺跡地図』に掲載されている周知の遺跡であるがバイパス計画路線上に一部がかかることが判明した。このため県教育委員会では昭和63年７月に路線内における範囲確認調査を行って発掘調査が必要な面積を確定し、９月５日から発掘調査を実施したものである。

第２節　調査の組織と構成

遺跡名	上岱（うわだい）Ⅰ遺跡
遺跡所在地	秋田県北秋田郡阿仁町水無字上岱136－１他
調査期間	昭和63年９月５日～11月７日
調査面積	1,200m²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	児玉　　準（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
総務担当	加藤　　進（秋田県埋蔵文化財センター　主　査　）
	高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター　主　事　）
調査協力機関	北秋田土木事務所
	阿仁町教育委員会
	古河林業株式会社阿仁林業所

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地（第１図）

阿仁町はその大部分が丘陵地で、米代川の一支流阿仁川が南北を貫流する。南から比立内、笑内、荒瀬、阿仁合、小渕などの集落や、集落から広がる水田や畑地も、この阿仁川によって形成された南北に細長い河岸段丘の上や氾濫平野に発達したもので、秋田内陸縦貫鉄道や国道105号も東西両面から迫る丘陵の間を阿仁川と交錯しながら縫うように走っている。

上岱Ⅰ遺跡は、阿仁町水無地区にあり、秋田内陸縦貫鉄道阿仁合駅の北方約１km、北緯40°0′、東経140°24′の位置に所在する。

遺跡付近では阿仁川が一旦西へ曲流し、すぐに東へ急激にカーブしてから北上するので、上下２面ある段丘は西へ突き出た半島状の形勢となり、この上位の段丘に遺跡が立地している。

遺跡は標高120ｍほどの平坦な段丘が、東側にある真木愛后、八巻大楯、広岨など500ｍ級の山々から流れ落ちる岩延沢、真木沢と呼ばれる２本の沢によって南北を画された中にある。北東から西側にかけては下位の段丘まで15ｍほどの比高差があるが、反面、南東側は非常になだらかに丘陵地へと連なっている。

第２節　歴史的環境（第１図）

上岱Ⅰ遺跡のある阿仁町には、『秋田県遺跡地図』(註１)、『秋田県の中世城館』(註２)によれば、13箇所の遺跡が登録されているが、その数は阿仁川流域の森吉町阿仁前田、米内沢付近に比べ、はるかに僅少であり、時代も縄文時代と中世に限られる。

縄文時代の遺跡は９箇所であるが、荒瀬のように既に大部分が消滅した遺跡もある。上岱遺跡は古く明治年間に石鏃出土地として数えられ(註３)、昭和３年の『日本石器時代遺物発見地名表』(註４)にも「阿仁合町水無字上岱畑」とあるのを見ると、少くとも明治時代中頃から何らかの形で知られていた遺跡である。根子にある魚形文刻石は武藤鉄城氏によれば縄文中期の遺跡との関連が推定され(註５)、昭和30年に県重要文化財に指定されている。中世の大阿仁・小阿仁地方は嘉成氏の支配するところで、中世城館は風張城、高田城、根子館、八幡館が知られる。しかし、阿仁町ではこれまでに発掘調査が行われておらず、これら遺跡の詳細は知り得ない。阿仁の歴史で顕著なのは鉱山の存在で、阿仁街道と密接な関連を持っていた。阿仁鉱山は金・銀・銅山の総称で、最古の鉱山は天正３年（1575年）発見の湯口内銀山であるとされる(註６)。

註１　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』1976（昭和51年）

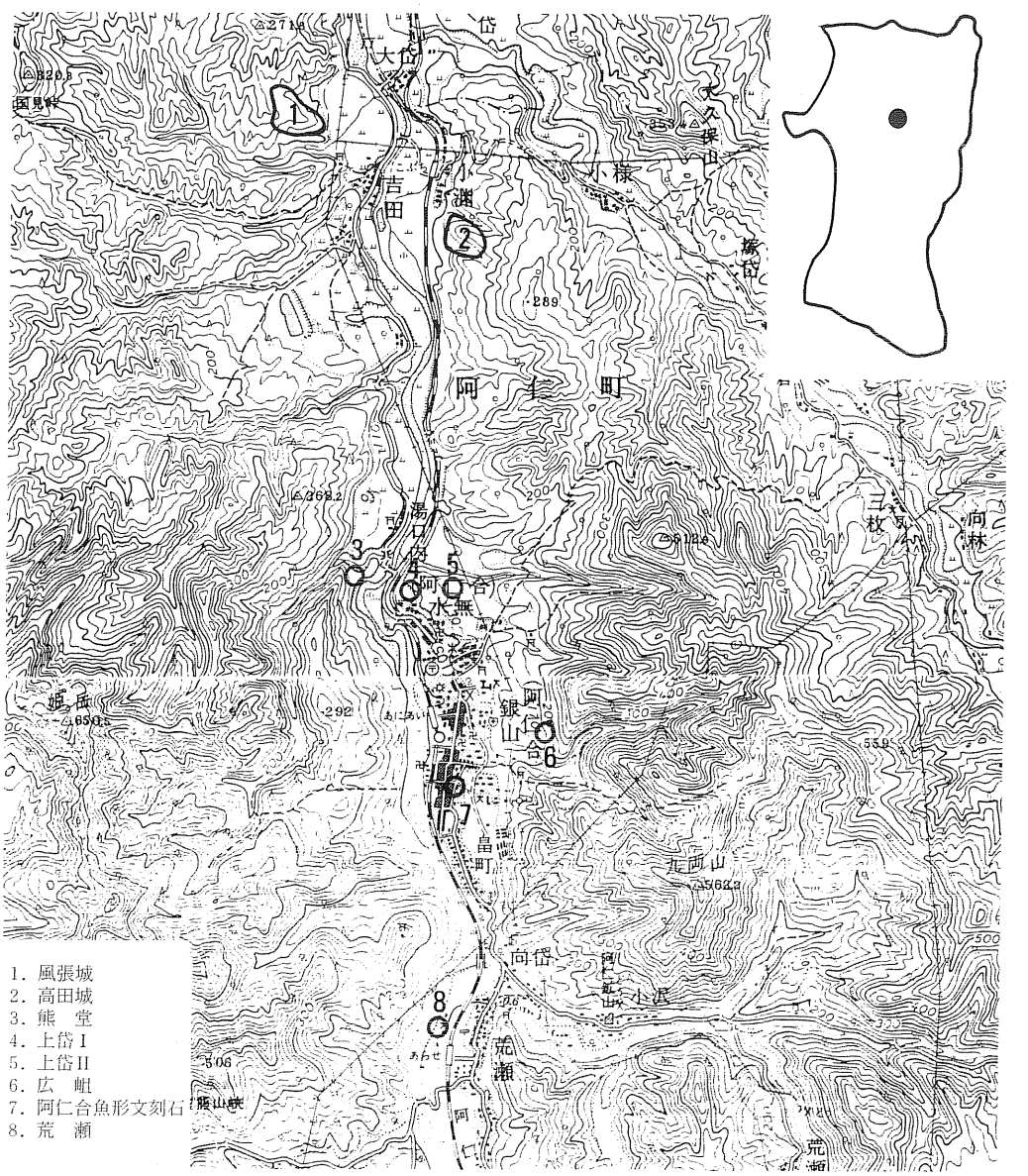
註２　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56年）

註３　真崎勇助　「秋田県鏃石産地一覧表」『東京人類学会雑誌』第３巻第24号　1888（明治21年）

註４　東京帝国大学　『日本石器時代遺物発見地名表』　1928（昭和３年）

註５　武藤鉄城　「秋田県下の魚形線刻石」『石器時代』第３号　1956（昭和31年）

註６　秋田県教育委員会　『歴史の道調査報告Ⅶ阿仁街道』秋田県文化財調査報告書第133集　1985（昭和60年）



第１図　上岱Ⅰ遺跡周辺地形・遺跡図

0　1　2km

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

上岱Ⅰ遺跡は、標高120ｍほどの平坦な段丘上に立地する。北東と南西からわずかにくびれる浅い沢が入り込んでおり、これによって区画される東西約100ｍ、南北約150ｍほどの範囲内に遺跡が含まれるものと推定される。

遺跡付近の表層地質は第四紀更新世の段丘堆積物で、火山灰と砂礫からなる。遺構はこれを掘り込んでおり、竪穴住居跡の床面は黄褐色の砂質土であるが、深く掘り込まれた土坑や柱穴の底面はその下の円礫層にまで達する場合がある。表土は浅く、遺構のない地点では厚さ10～20㎝の黒褐色の耕作土を剝ぐと地山となる。

国道105号のバイパスは阿仁川を跨ぐ喜鵲橋からそのまま直進して遺跡地の西斜面を削り、段丘上に上るものであるが、上岱Ⅰ遺跡全体から見れば、調査地点はその西端部にあたるものと考えられる。段丘上は古河林業株式会社阿仁林業所の苗圃や畑地となっており、遺物が採集される。また、国道から苗畑事業所に上る道路の法面にも竪穴住居跡の断面が現れており、この道路を造成した時点にも遺物が出土したものと考えられる。

調査範囲内からはほぼ全域から遺構が検出されたが、殊に段丘縁辺部に集中する感があり、縄文時代の竪穴住居跡19軒、土坑21基が検出された。しかしこれらは、段丘縁辺部に限られるものではなく、東側の苗圃内にも多くの遺構の拡がりが推定される。

西側斜面とその下方の低地にトレンチを設定したが、上方から崩落したと考えられる若干の遺物が出土したのみで、いわゆる捨て場としての利用はなされていない。現国道造成前は、この低地は湿地状となっていたというから、段丘上から浸透した伏流水が湧出していたものかも知れない。

第２節　調査の方法

上岱Ⅰ遺跡の調査範囲は、バイパス建設工事に伴うものであるために長さ175ｍ、幅30ｍと狭長である。グリッドの設定にあたり、北秋田土木事務所が工事計画路線内に打設した路線中心杭のうち、調査区中央部の中心杭№147をグリッド基点Ｍ50として、この点から中心杭№148＋10.55を見通した線をグリッド南北基線、これに直交する線を東西基線とし、４ｍ四方のグリッドを設定した。南北基線には２桁の算用数字、東西基線にはアルファベットを用い、グリ

第2図　遺跡周辺地形・グリッド配置図

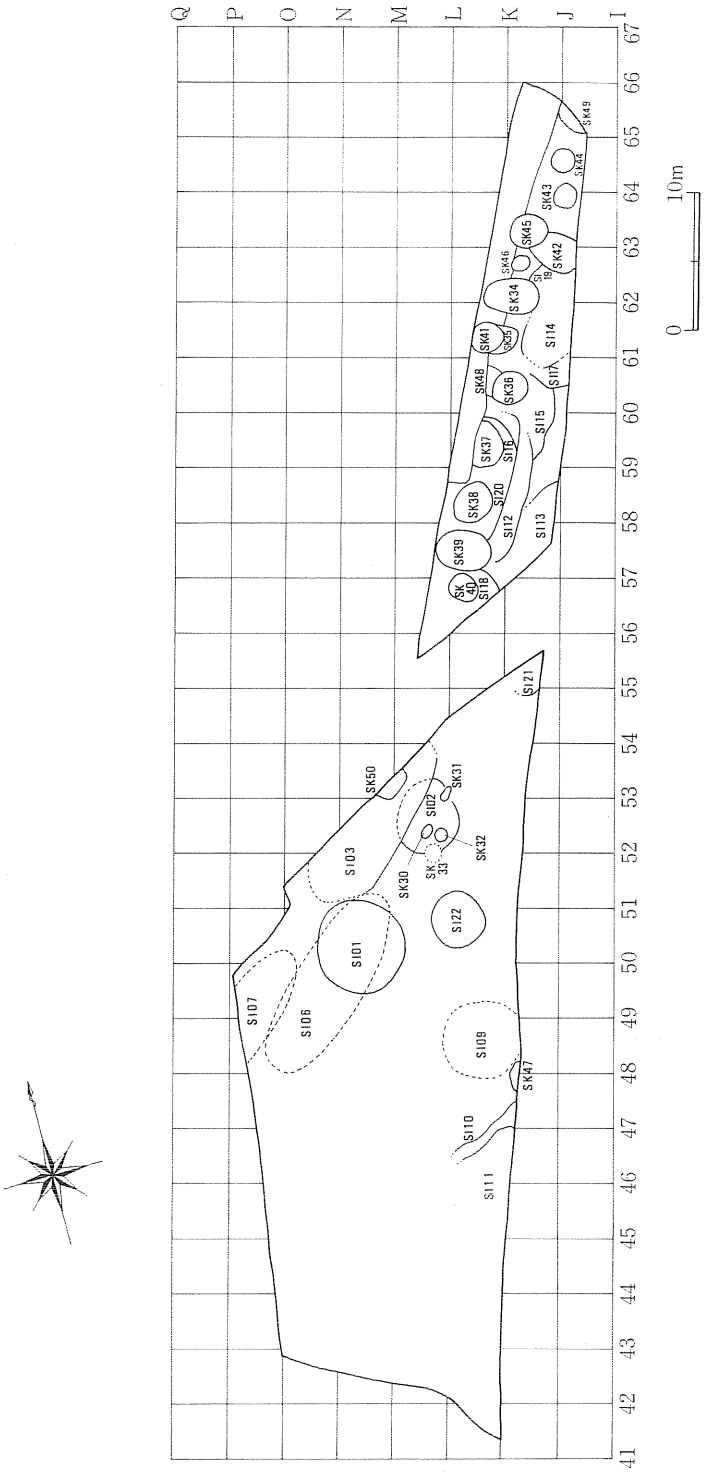
ッドの呼称は南東隅の交点における両者の組み合わせを用いた。遺構実測図はグリッド坑を利用し、縮尺10分の１、20分の１で作成した。なお、遺構にはその種別によりアルファベット略記号と、発見順を示す番号を付した（第２図）。

第３節　調査経過

９月５日、阿仁町公民館において作業員に対する説明会を行い、現場に機材を搬入する。６日、プレハブ内の整理、調査区域内の草刈りを行って７日から調査区南半部の表土剝ぎを開始する。表土は浅く、すぐに竪穴住居跡らしい落ち込みが検出された。９日、調査区南半部にグリッドを設定、13日、表土剝ぎをほぼ終了、竪穴住居跡の床面や埋設土器を検出した。19日、ＳＩ01竪穴住居跡の掘り下げを行い、複式炉を有する縄文時代中期末の遺構で、これに切られるＳＩ06も柱穴を掘り下げることによって長楕円形の大型住居跡であることが判明した。26日までに８件の竪穴住居跡の他、土坑４基を検出した。29日、調査区南半部の竪穴住居跡の写真撮影を終え遺構の実測を開始した。

９月30日より調査区北半部の表土剝ぎを開始、以後、遺構の検出が続き、10月12日までに竪穴住居跡17軒の他、大型の土坑も検出され、これらは段丘の縁辺部に並んでいることが判明した。

19日、調査区北半部の写真撮影を行い、22日には西側斜面にトレンチを設定した。24日から遺構の平面実測や南半部の補足調査などを行い、11月７日、発掘機材を搬出して調査を終了した。


Q
P
O
N
M
L
K
J
I
67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
SK49
SK44
SK43
SK45
SK46
SK42
SK34
SK35
SK41
SK48
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40
SI18
SI20
SI12
SI13
SI15
SI17
SI14
SI16
SI19
SI121
SK50
SI02
SK31
SK32
SK33
SK30
SI03
SI01
SI22
SI07
SI06
SI09
SK47
SI10
SI11
0
10m

第３図　遺構配置図

第４章　調査の記録

発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡19軒、土坑21基の計40遺構が検出された（第３図）。以下に竪穴住居跡、土坑の順に説明する。

第１節　検出遺構と遺物

１　竪穴住居跡

ＳＩ01（第４・５図，図版１・２）

Ｍ50グリッドを中心に検出された。平面形は径6.95ｍの円形で、面積は34.2㎡である。壁は高さ30～38㎝で全体にほぼ垂直に近い立ち上がりで、壁構はない。床は平坦で堅くしまっているが、炉南西部がやや凹んで柔かい。床面に15個のピットがあり、このうちＰ１～Ｐ８の８個が本住居跡の柱穴であると考えられる。径25～48㎝で、深さ30～69㎝である。住居床面西側に長軸200㎝、短軸105㎝の複式炉が設けられている。石は１個を除いて川原から採集したと見られる花崗岩を用いており最大のものは長さが40㎝ある。うち１個は敲石を使用している。埋設土器は底部を欠き、径24.5㎝、器高31㎝、ＲＬ縄文が施された深鉢形土器である（第19図１）。ＳＩ06を切る、大木10式期の遺構である。

遺物はポリ袋で１袋が出土した。第19図２は小型の深鉢形土器で磨消縄文手法を用いた文様が描かれている。他に注口土器の注口部分と磨製石斧（第22図１）も出土した。

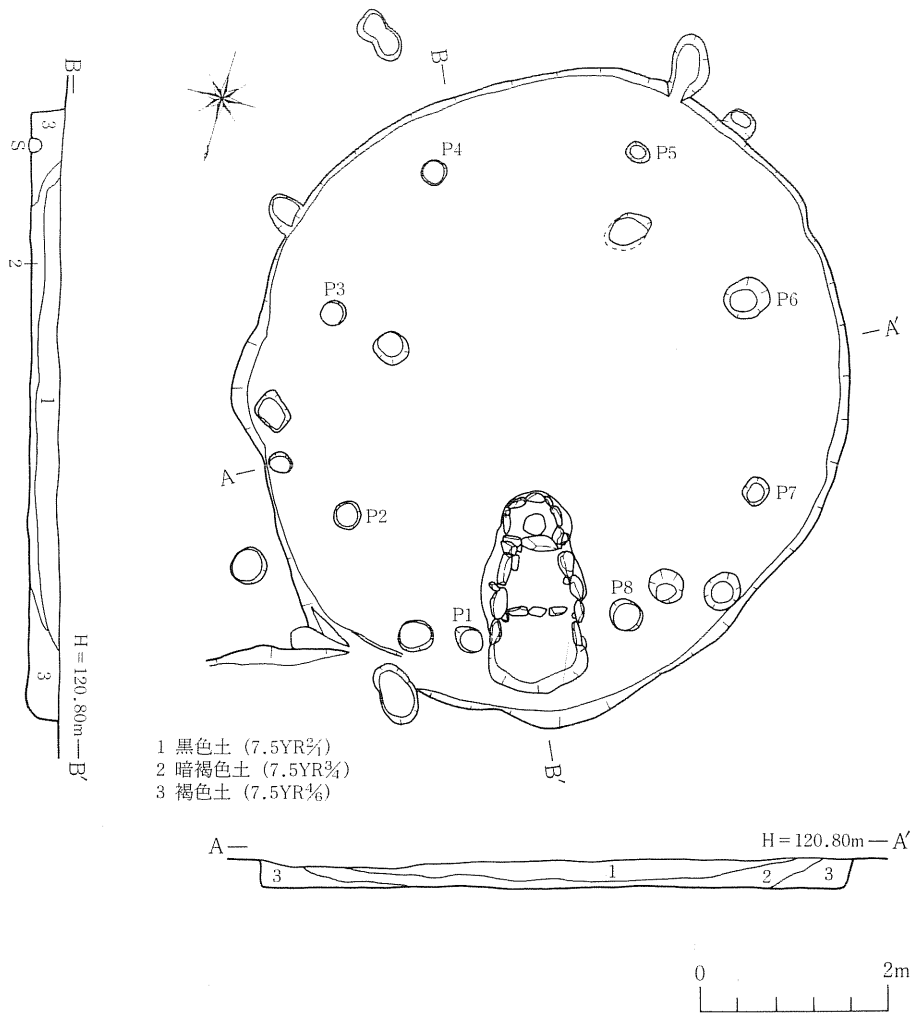
ＳＩ02（第６図，図版１・２）

Ｌ52・53グリッドに検出された。平面形は長軸5.6ｍ、短軸4.5ｍほどの略円形で、面積は約19.1㎡である。壁はやや外方に傾斜しており高さ12～23㎝である。床面は平坦で堅くしまっている。ピットが９個あり、このうちＰ９を除いて本住居跡の柱穴と考えられる。柱穴はＳＫ33と重複するＰ４を除いて径22～38㎝、深さ32～60㎝である。床中央部東寄りに土器埋設炉がある。埋設土器（第19図3）は径27㎝、口縁部より14㎝下までで以下は存在しない。大木８ａ式の深鉢形土器で、周囲に焼土が若干見られるが土器自体はさほど火熱を受けていないように見られる。

遺物はポリ袋で１袋が出土した。土器は大木８ａ式の他、円筒上層ｄ式土器が見られる。石器には掻器（第21図７）、磨製石斧（第22図２）、凹石（第23図１）がある。

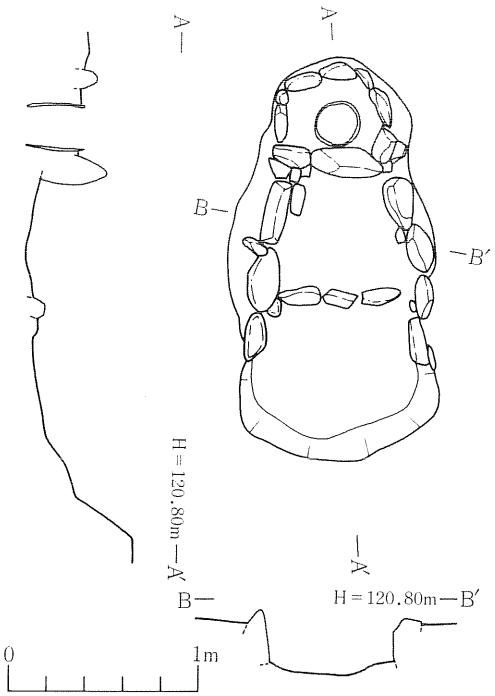
ＳＩ03（第７図，図版２・３）

Ｌ52・53、Ｍ51・52・53、Ｎ51・52グリッドに検出された。北西側を道路工事によって切られ、北端に倒木痕が重複しているので全容は不明であるが、平面形はおおよそ長軸13.5ｍ、短



第４図　SI01竪穴住居跡

軸６ｍの長楕円形を呈するものと考えられる。ＳＫ50に切られ、ＳＩ02を切っている。壁はわずかに外方に傾斜し、22～36cmほどの高さであるが、ＳＩ02と重複する箇所では15cm前後の高さである。床面は平坦で堅くしまっている。ＳＫ50とＳＩ02内のピットを除けば、床面に13個のピットがある。ピットの配列を見ると、径は35～50cm前後、床面からの深さ39～64cmのＰ2･4･6･8がほぼ一列に並び、これに隣接して径65～92cm、深さ50～85cmの大型のピットが並んでいる。これによって、ＳＩ03内には新旧２時期の竪穴住居跡が存在したものと考えられるが、別個の住居の重複とみるか、一軒の住居の立替とみるかは根拠に乏しく、両者の新旧関係も明らかではない。Ｐ７の南側には長さ１．３５ｍ、高さ７cmの壁がこの部分のみに見られ、Ｐ７はその外方に張り出していることから、この壁はＰ2･4･6･8の柱に付随するものであろうが、こ



第５図　SI01竪穴住居跡炉

のことによっても両住居跡の新旧関係は不明である。ただし、Ｐ2･4･6･8とＰ3･5･7･9は前述のようにほぼ同一位置に構築されていることを考慮すると建て替えである可能性があろう。Ｐ10は径64cm、深さ33cmでＰ９はこれに対応する柱穴であろう。

住居西端部に長軸110cm、短軸90cm、深さ50cmの大型のピットがあり、その東側から南側にかけて、幅約50cm、高さ10cmほどで湾曲する土手状の高まりが見られる。長軸70cm、短軸54cmの地床炉がこの北側にある。

本住居跡に確実に伴う土器はない。石器としては石匙が２点出土し、第21図９はそのうちの１点で縦形石匙である。同図13は下端部のみ両面加工を施して刃部を作出した掻器様の石器である。

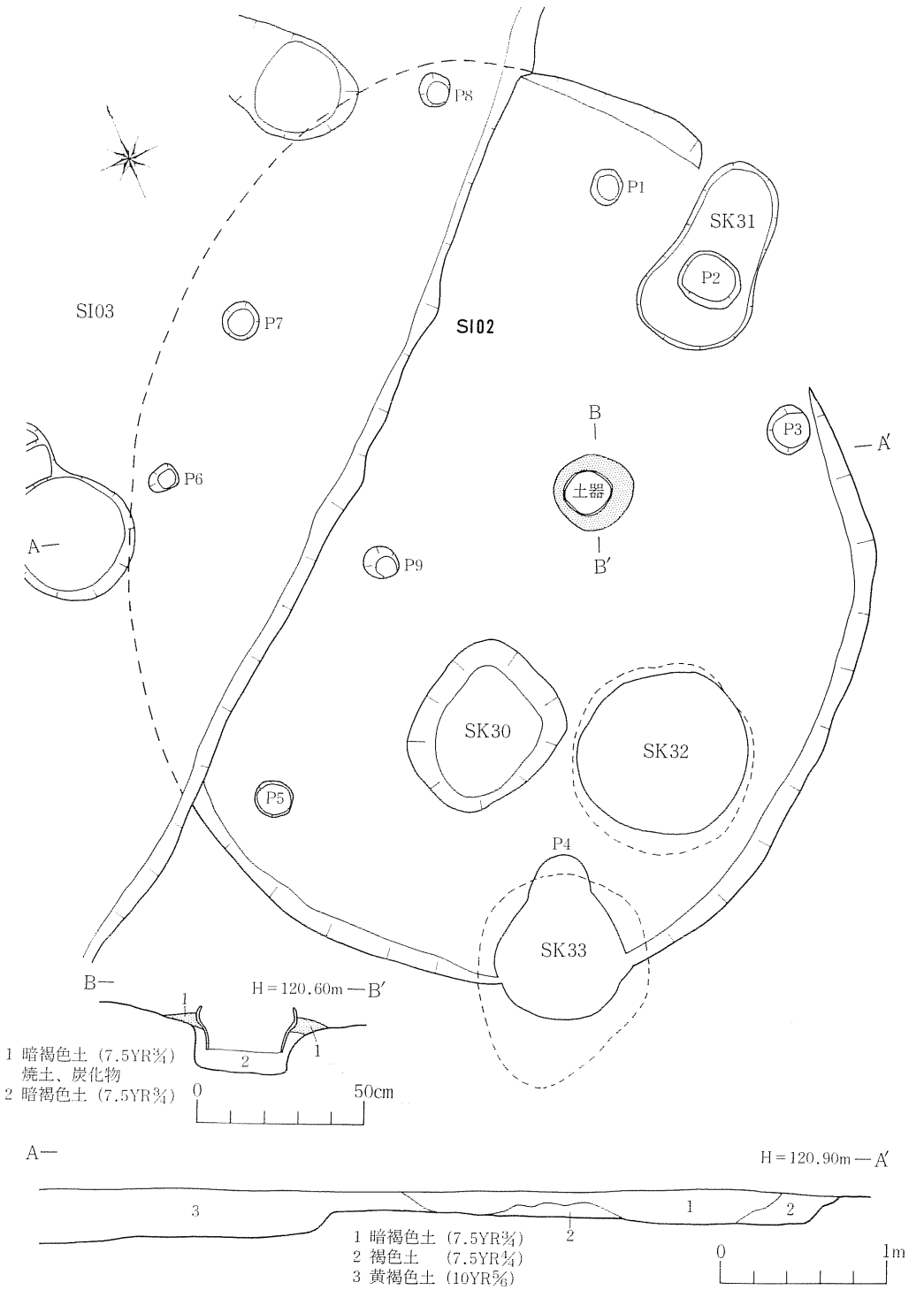
ＳＩ06（第８図，図版６）

M49･50、N48～50グリッドにある。本住居跡は壁が存在しないが、柱穴位置から推定される平面形は長軸14.8ｍ、短軸５ｍの長楕円形で、面積は63.0㎡である。北半部がＳＩ01に切られているが、ＳＩ01床面にも本住居跡の柱穴と考えられるピットがあり、中軸線を介しての対応関係から都合11個のピットが柱穴であると推定される。ＳＩ01に切られていない柱穴は径40～78cmにわたり、深さは25～65cmである。床面は周囲より約10cmほどなだらかに凹み、堅くしまっている。中軸線上に埋設土器が２基あり、北側の埋設土器の外側にはわずかに焼土が見られるが、南側のそれには伴わない。土器は細片化しており復原が不可能であるが器高約10cmのみを埋設していたようである。北側の土器は円筒上層ｄ式である。

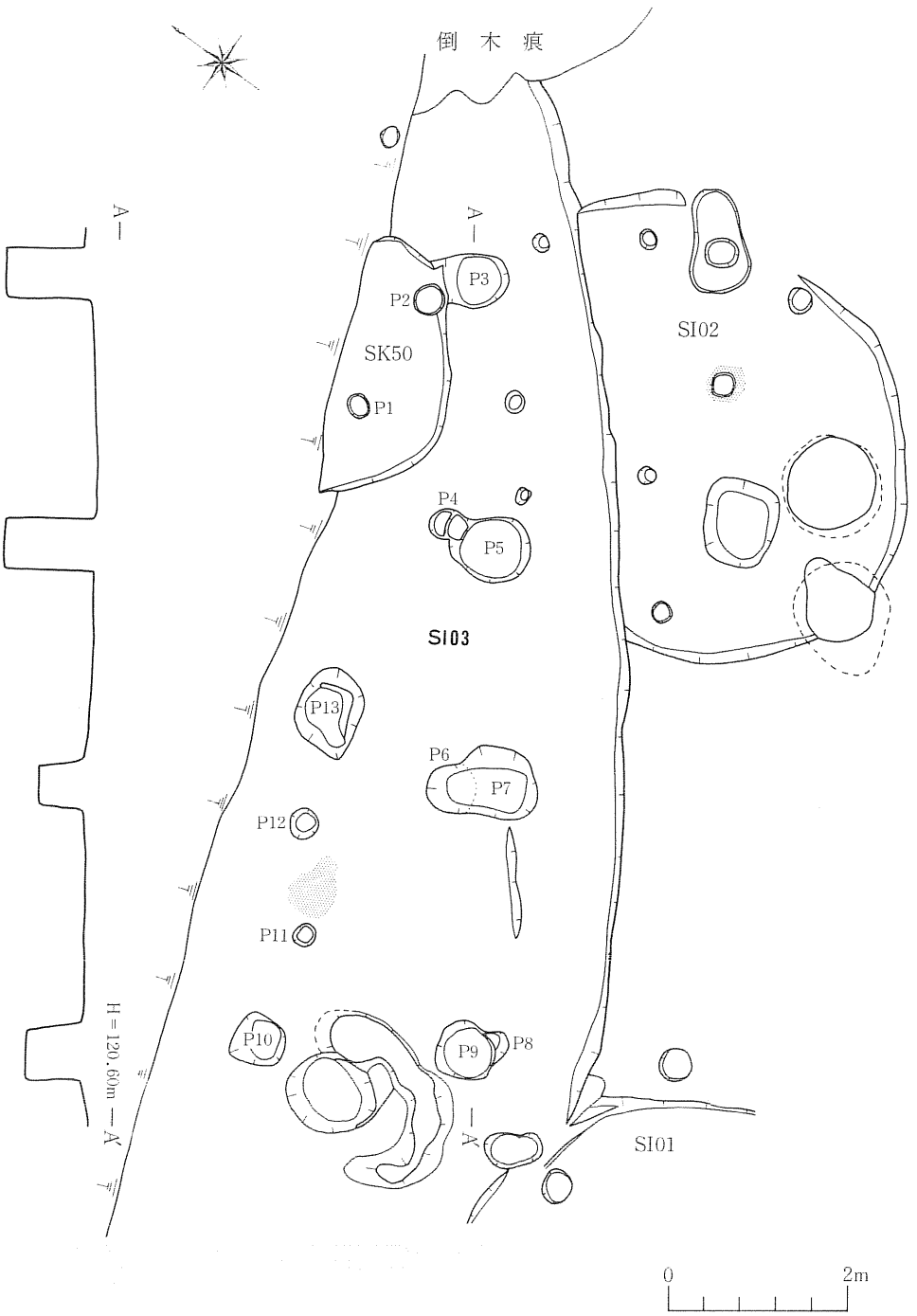
第20図１は、覆土中からの出土で、円筒上層ｄ式である。

ＳＩ０７（第８図）

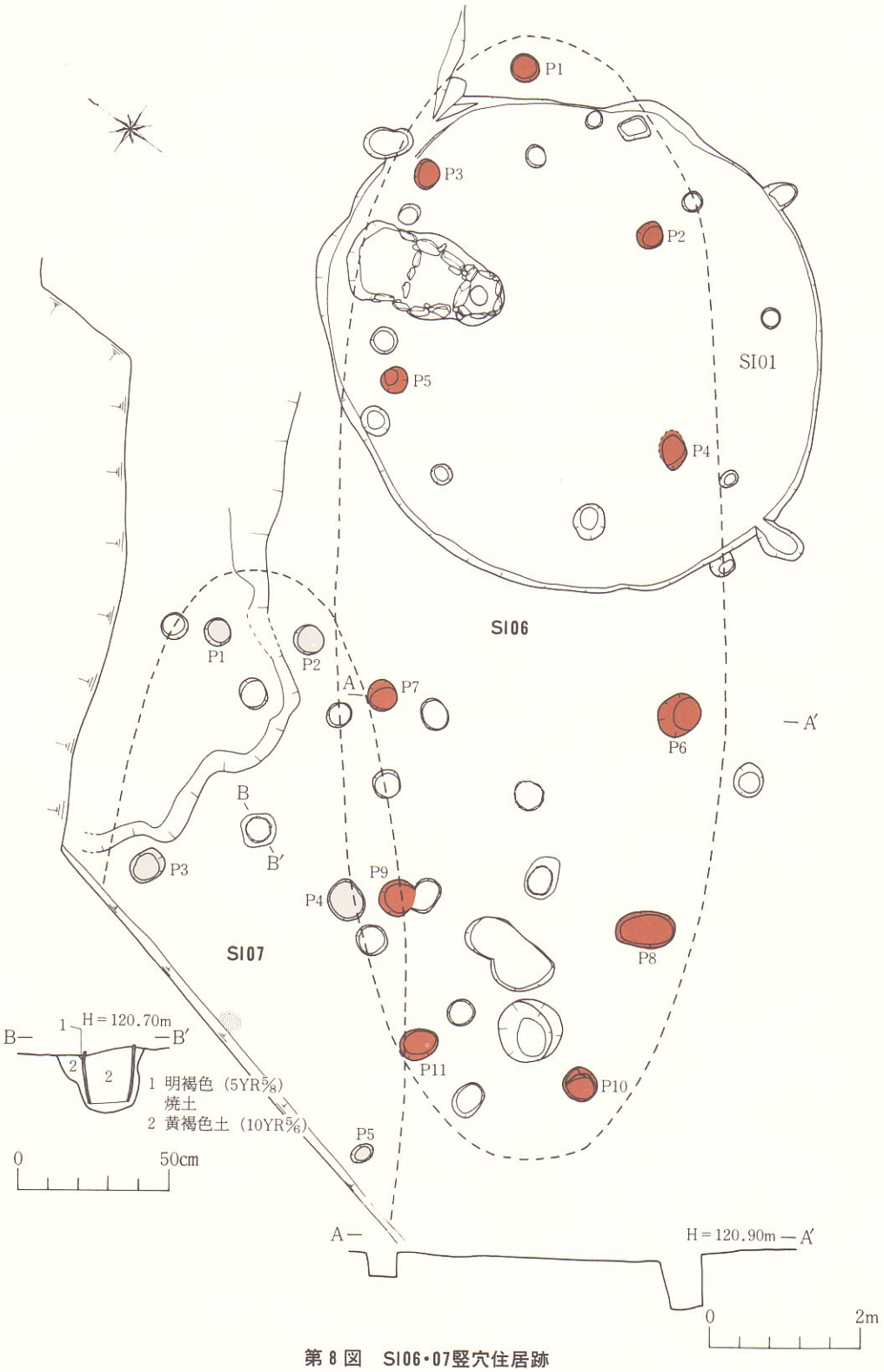
O48･49グリッドに位置する。ＳＩ06同様に壁がないが、炉と埋設土器が住居跡に伴うものと仮定し、両者を結んだ線を中軸線とした上でその付近のピットから柱穴と住居の輪郭を推定した。推定される住居跡は約1/2ほどで南西部は未調査区に入っている。長軸は不明であるが、短軸は約４ｍの長楕円形である。壁はなく床面はおおよそ平坦で、殊に炉付近が堅くしまっている。柱穴は５個で径30～52cm、深さ23～50cmである。径33cmほどの地床炉があり、その北東2.5



第6図　SI02竪穴住居跡



第７図　SI03竪穴住居跡



第８図　SI06・07竪穴住居跡

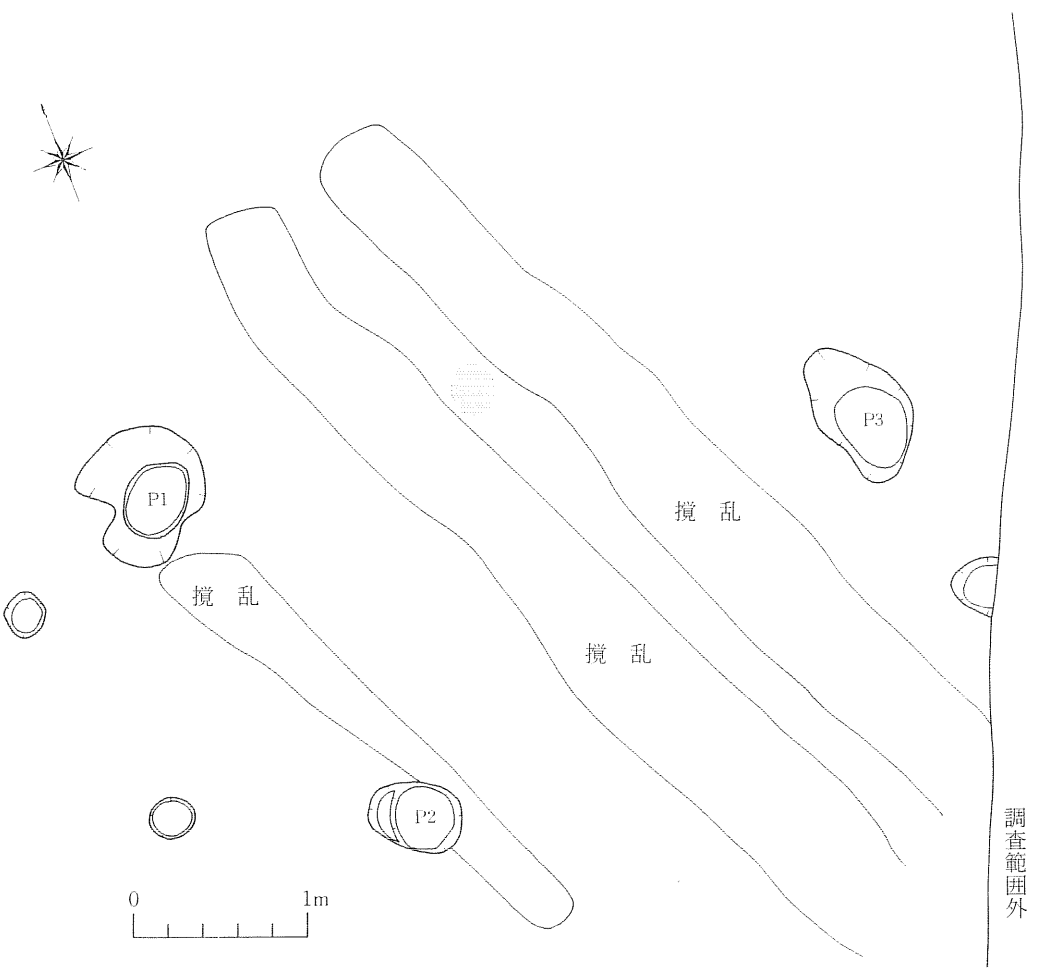
ｍに径33cm、深さ37cmの円筒上層ｄ式の深鉢形土器が埋設されている。土器には底部がなく、周囲にわずかに炭化物がみられる他は焼土も存在しない。ＳＩ06と重複するが新旧関係は不明である。

ＳＩ09（第９図）

Ｋ48グリッド内の地山面に地床炉が検出され、その付近に柱穴と考えられるピットがあるので竪穴住居跡とした。耕作による攪乱が地山面をも削っているためか、壁は存在せず床面も特に堅い箇所は見られない。地床炉は長軸30cm、短軸25cmの規模で、この周囲のP1～P3は径40～80cmで、深さ39～52cmである。本住居跡に明確に伴う遺物はない。

ＳＩ10（第10図）

Ｊ47・Ｋ46･47グリッドに検出した。高さ8～25cmでややゆるやかに外方に張り出す壁が見られ、この方向から北東～南西方向に長軸を有する竪穴住居跡と考えられるが、平面形・規模は



第９図　SI09竪穴住居跡

不明である。床面は平坦であるが堅くはない。本住居跡に付随する炉・柱穴は不明である。ＳＩ11によって切られている。

遺物は土器片がポリ袋２袋出土した。円筒上層ｃ・ｄ式土器、大木８ａ式土器である。石器は凹石が１点出土した。

ＳＩ11（第10図）

Ｋ45・46グリッドに検出した。ＳＩ10を切っている。平面形は不明であるが、高さ８～14cmで外方にゆるやかに傾斜する壁が存在する。床面は平坦であるが堅くはない。耕作による攪乱が床面を削っている。ピットが９個あり、Ｐ６は径92cm、深さ46cmで、他は径32～60cm、深さ10～51cmである。ＳＩ10の柱穴もこの中に含まれているものと考えられる。床面に地床炉があり、その周囲や住居跡覆土中に炭化物が多く含まれている。炉は調査範囲外に入りこんでおり全容は不明であるが、長軸1.2ｍほどと推定される。

遺物は土器片がごく少量出土したが土器型式は不明である。

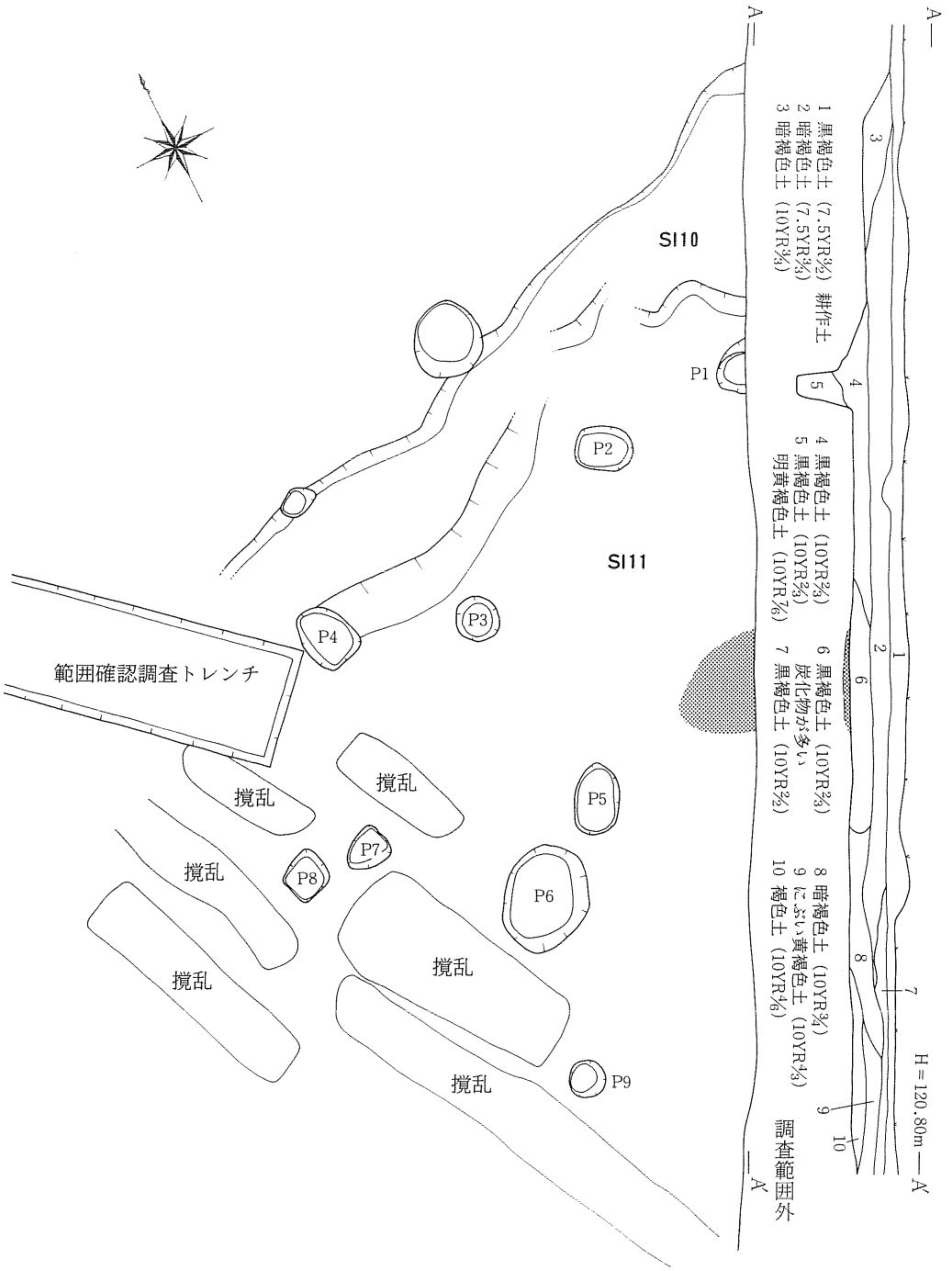
ＳＩ12（第11図）

Ｋ57グリッドからＪ59グリッドにかけて検出された。ＳＩ13を切っているが、ＳＩ15・16との新旧関係は不明である。ＳＩ20とも重複するが、この場合本住居跡に付随すると考えられる炉が存在することから本住居跡の方が新しいと考えられる。ＳＫ38より新しいことは明白でＳＫ37・39との関係も同様であろう。全容は不明であるが長軸は約11ｍと推定される。残存する東側の壁は26～33cmの高さで部分的に垂直であるが、中央部は外方に傾斜して立ち上がっている。床面は南ほど低くなり、あまり堅くはない。本住居跡に付随する柱穴はP1～P3であろう。径32～54cm、深さ53cm～70cmである。P2･3の西側に径62cmほどの円形の地床炉が存在する。ＳＫ38覆土の上にあたり、焼土と炭化物が分布している。

遺物は覆土中からポリ袋で７袋出土した。第20図２・３は撚紐の側面圧痕文が施された大木７ｂ式土器である。４は円筒上層ｂ式土器の口縁部山形突起である。他に円筒上層ａ式と思われる土器片もある。石器には石鏃（第21図４）、石槍（同図５）、磨製石斧（第22図３）、磨石（第23図３）の他、凹石が１点出土した。

ＳＩ13（第11図，図版５）

Ｊ57・58グリッドに位置する。調査範囲外に入り込んでいるため全容は不明であるが、壁の状態から平面形は楕円形であると思われる。ＳＩ12によって切られており、残存する壁は高さ８～18cmでやや外方に傾斜して立ち上がっている。床面は平坦で堅くしまっている。ピットが９個あり、小型のものでは径20cmほどで、深さは17～20cmであるが、大きめのものは径45cm、深さ70cmほどのものもある。南端部のピットは長軸88cm、短軸52cm、深さ47cmである。柱穴は断定し難い。また、長軸36cm、短軸26cmの石囲炉が付設されている。南西端の石を欠いているが、



第10図　SI10・11竪穴住居跡

0　2m

石抜痕が残る。石は少し焼けているが焼土はほとんど見られない。石囲炉の南側に２基の埋設土器がある。Ａ埋設土器は床面を径48cm、深さ25cmほどに掘り下げた中に埋設したもので、径30cmの深鉢形土器である。底部を欠き、代わりに土器片を底部に敷いている。Ｂ埋設土器は平面形長軸56cm、短軸38cmの楕円形で、深さ18cmほど掘り下げた中に埋設したもので円筒上層ｃ式土器の胴部である。いずれにも焼土は見られない。本住居跡に付随するものと考えられる。

遺物は他に床面から円筒上層ｄ式土器、覆土中から大木８ａ式土器（第20図５）、円筒上層ｃ・ｄ式土器が出土した。石器は石錘が一点（第22図５）のみである。

ＳＩ14（第13図，図版４）

Ｊ61･62グリッドに位置し、ＳＩ17･19、ＳＫ42と重複している。土層断面ではＳＫ42を切っていることが明らかであるが、ＳＩ17･19との新旧関係は不明である。東側が調査範囲外に入っているが長軸約8ｍ、短軸推定3.5ｍほどの楕円形を呈するものと考えられる。壁はこの住居の南部にのみ残存し、高さ約10～15cmでわずかに外方に傾斜している。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。本住居跡に関連すると考えられるピットは12個あり、このうち、Ｐ1～Ｐ3・Ｐ7・Ｐ8・Ｐ10・Ｐ11が柱穴と推定される。これらの柱穴の大きさは径24～56cm、深さ22～47cmである。住居の中軸線上と考えられる位置に石囲炉が付設されている。厚さ２cmほどの偏平な石を用いて方形に石囲を組み、中に土器を埋設している。この炉の約60cm北に同様の土器埋設石囲炉を構築したかのような痕跡がみられる。炉を移築したのであろう。同じく住居中軸線上の南側には径80cm、深さ45cmで断面が摺鉢状のピットがある。このピットの周囲には壁から連続してピットを取り囲む幅約20cmの土手状の盛土がめぐってくる。

遺物は多く、覆土中よりコンテナ２箱半が出土した。図版８－５は円筒上層ｂ式の深鉢形土器で、口径25cm、器高32cmである。第21図３は土器底面でスダレ状圧痕が見られる。石器には石槍（第21図６）、掻器（同図８）、凹石（第23図２）、磨石（第23図４）がある。磨石は他に完形品が１点出土している。

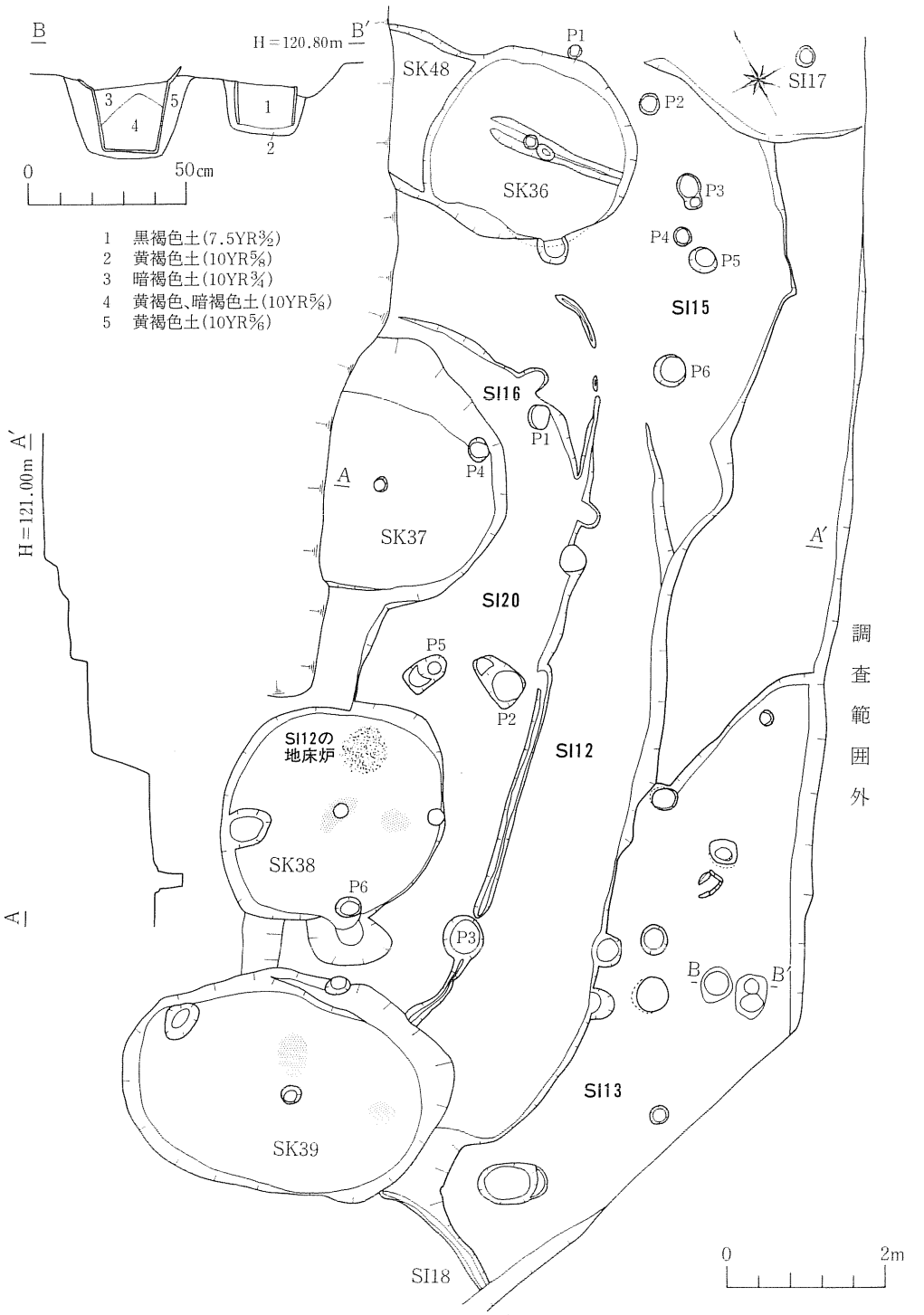
ＳＩ15（第11図）

Ｊ59･60グリッドに位置し、ＳＩ12･16･17･20、ＳＫ36と重複しているが、新旧関係は明確でない。平面形は円形ないし楕円形と推定される。壁は長さ5.6ｍが残存し、高さ17～21cmである。床面は西側ほどやや低くなり、堅くしまっている。本住居跡に付随すると考えられるピットはＰ１～Ｐ６である。径24～38cm、深さ25～58cmである。炉は検出されなかった。

遺物はポリ袋で２袋出土した。土器は大木８ａ、８ｂ式土器である。

ＳＩ16（第11図）

Ｋ59グリッドに位置する。高さ22～28cmで垂直に近い立ち上がりの壁が長さ約３ｍほど残存するだけで柱穴・炉などは見られない。平面形も定かでない。わずかに残る床面はほぼ平坦で



第11図　SI12・13・15・16・20竪穴住居跡

堅い。ＳＫ37よりは新しいと思われるが、ＳＩ12･20との新旧関係は不明である。

遺物はポリ袋で３袋出土した。土器は円筒上層ｂ式土器である。第21図12は台形状の石器で刃部に調整剥離を施している。

ＳＩ17（第13図）

Ｊ60グリッドに位置する。ＳＩ15との新旧関係は不明であるが、ＳＩ14よりも古いと考えられる。約３ｍの長さで高さ10～39㎝の壁が残存するが平面形は不明である。床面は平坦で堅くしまっている。本住居跡に明確に付随すると考えられる柱穴は不明である。床面に径23㎝、器高19㎝、円筒上層ｂ式の深鉢形土器上部を用いた埋設遺構がある。

ＳＩ18（第12図，図版５）

Ｋ56･57グリッドに位置し、約1/2は道路下の未調査区に入り込んでいる。平面形は円形ないし楕円形と推定されるが規模は不明である。長さ２ｍ、高さ約20㎝の壁があり、幅10~15㎝、深さ12㎝の壁溝が認められる。ＳＫ40土坑に重複して床を設けており、径45㎝、深さ74㎝の柱穴が1個ある。また、川原石を用いた石囲炉が付設されており、長軸60㎝、短軸45㎝の規模である。

遺物は出土しなかった。

ＳＩ19（第13図）

Ｊ62グリッドに位置する。北東～南西方向に長さ1.2ｍの壁があり、堅くしまった床面があるだけであるが、ＳＩ14とは別の竪穴住居跡の一部であると考えられる。壁は高さ約20㎝で垂直に近い立ち上がりである。ＳＩ14・ＳＫ34･42との新旧関係ははっきりしない。

遺物は出土しなかった。

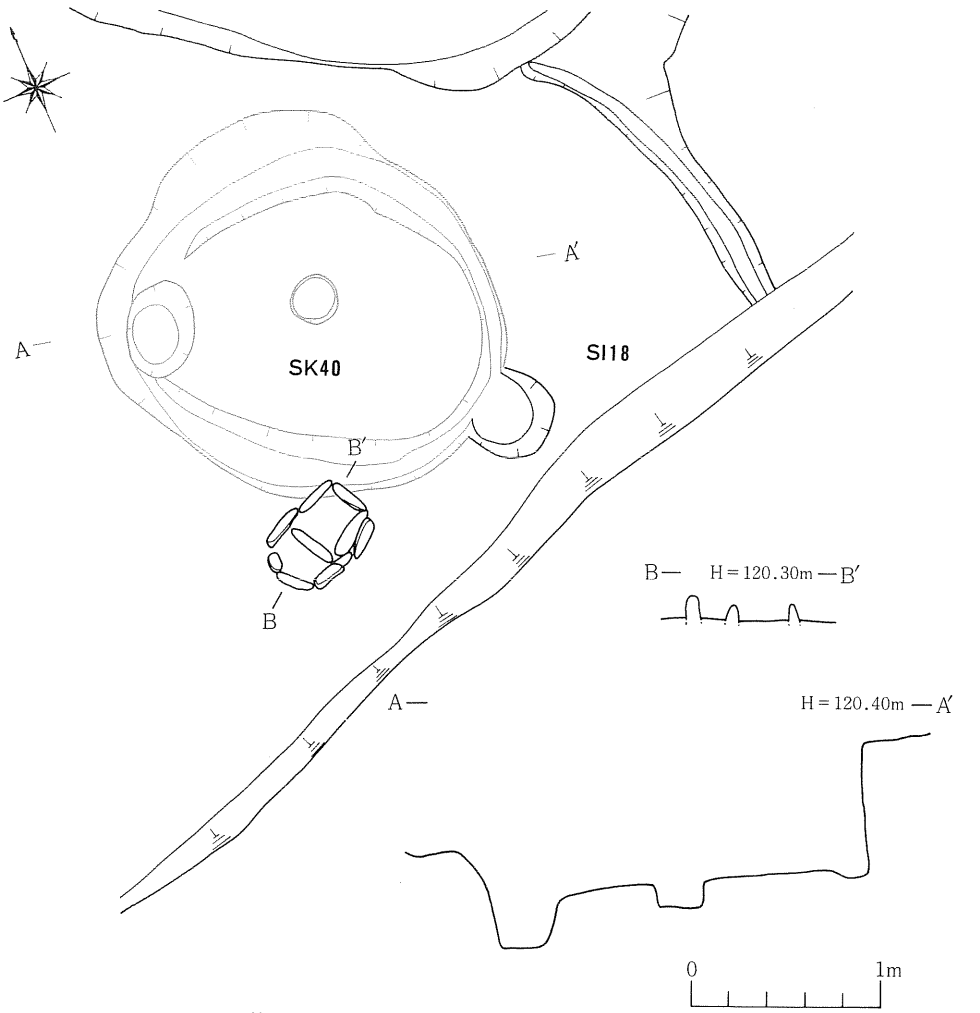
ＳＩ20（第11図）

Ｋ57～59、Ｊ59グリッドに位置する。壁はないが幅10～15㎝、深さ10㎝の壁溝が見られることから長軸約10ｍの長楕円形を呈する竪穴住居跡と考えられる。短軸の長さは不明である。床面はほぼ平坦であるが、あまり堅くはない。本住居跡に付随する柱穴はＰ4・Ｐ5・Ｐ6で径29～56㎝、床面からの深さ66～80㎝である。炉は検出されなかった。ＳＩ12･16との新旧関係は明確ではないが、ＳＫ37～39よりは本住居跡が新しいと考えられる。

遺物は出土しなかった。

ＳＩ21（第14図）

Ｊ55グリッド地山面に平坦で極めて堅くしまった床面を検出した。北側が道路による削土によって破壊され、東側は調査範囲外に入っているため平面形は知り得ないが、約10㎝の高さで湾曲する壁が存在する。床面に工事等による破壊が見られるがＰ1～Ｐ3は径35～52㎝、深さ47～52㎝あり、本住居跡の柱穴の一部と考えられる。炉、埋設土器等は検出されなかった。
遺物は土器辺がごく少量出土しただけである。土器型式は不明である。

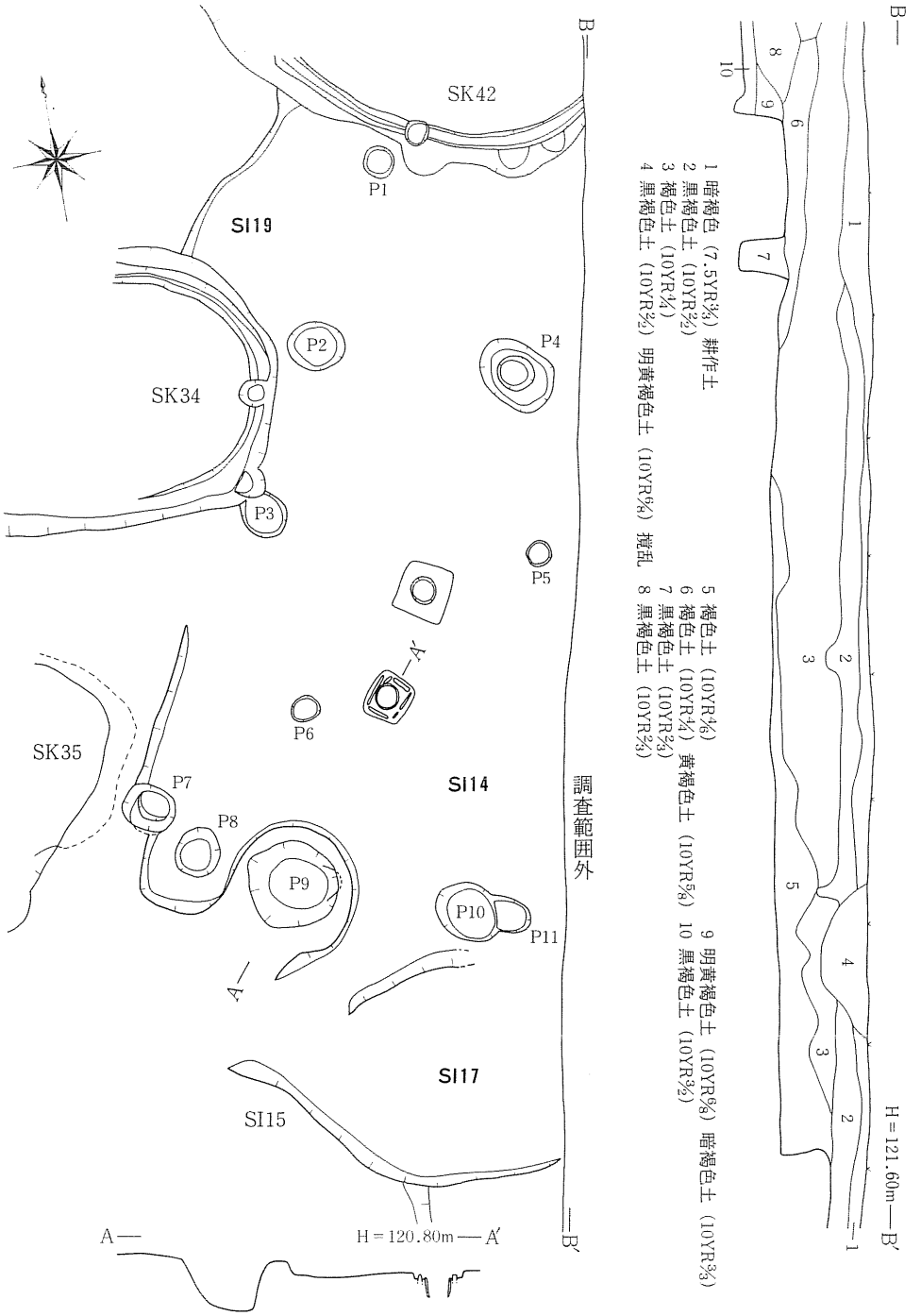


第12図　SI18竪穴住居跡・SK40土坑

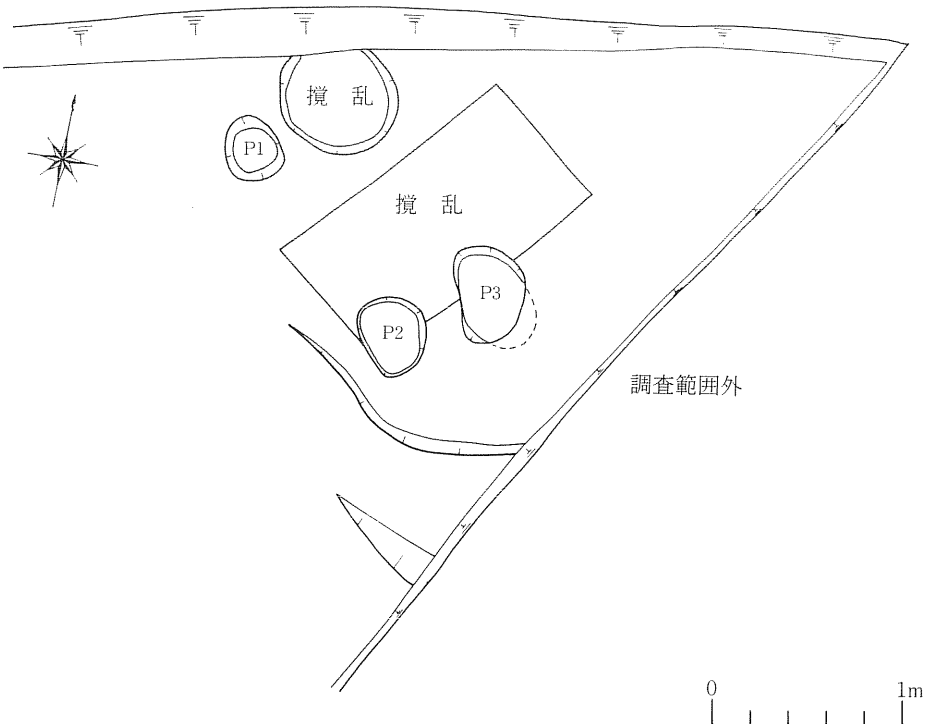
ＳＩ22（第15図，図版５・６）

Ｋ50･51グリッドに検出された。平面形は径4.35ｍの円形で、面積は12.5㎡である。壁は38～44㎝の高さで、いくぶん外方に傾斜して立ち上がり、壁溝はない。床面は平坦で殊に中央部が堅くしまっている。床面に５個のピットがあり、壁に近い位置にある４個が柱穴と考えられる。径23～42㎝で、深さは28～40㎝である。床中央部にも径74㎝、深さ36㎝のピットがある。床北西部に石囲、埋設土器のある炉が設けられているが本住居跡の上に倒木痕があるために、炉付近の床や炉全体が破壊を受けており、規模は不明である。炉の最大の石は長さ32㎝、幅13㎝である。他の遺構との重複はない。

遺物は土器片がポリ袋で３袋出土した。第19図４は口径26.2㎝、器高32㎝の深鉢形土器で底



第13図　SI14・17・19竪穴住居跡



第14図　SI21竪穴住居跡

部を欠き、外面には縦位の条痕が施されている。炉の中と床面から出土したがＳＩ01石囲炉埋設土器と大きさが酷似しており、破壊を受けた炉の埋設土器であると考えられる。第20図６～９は磨消手法が用いられた土器である。同図10には楕円形の刺突と粘土の盛り上がりによる刺突文が施されている。

２　土　　坑

ＳＫ30（第16図）

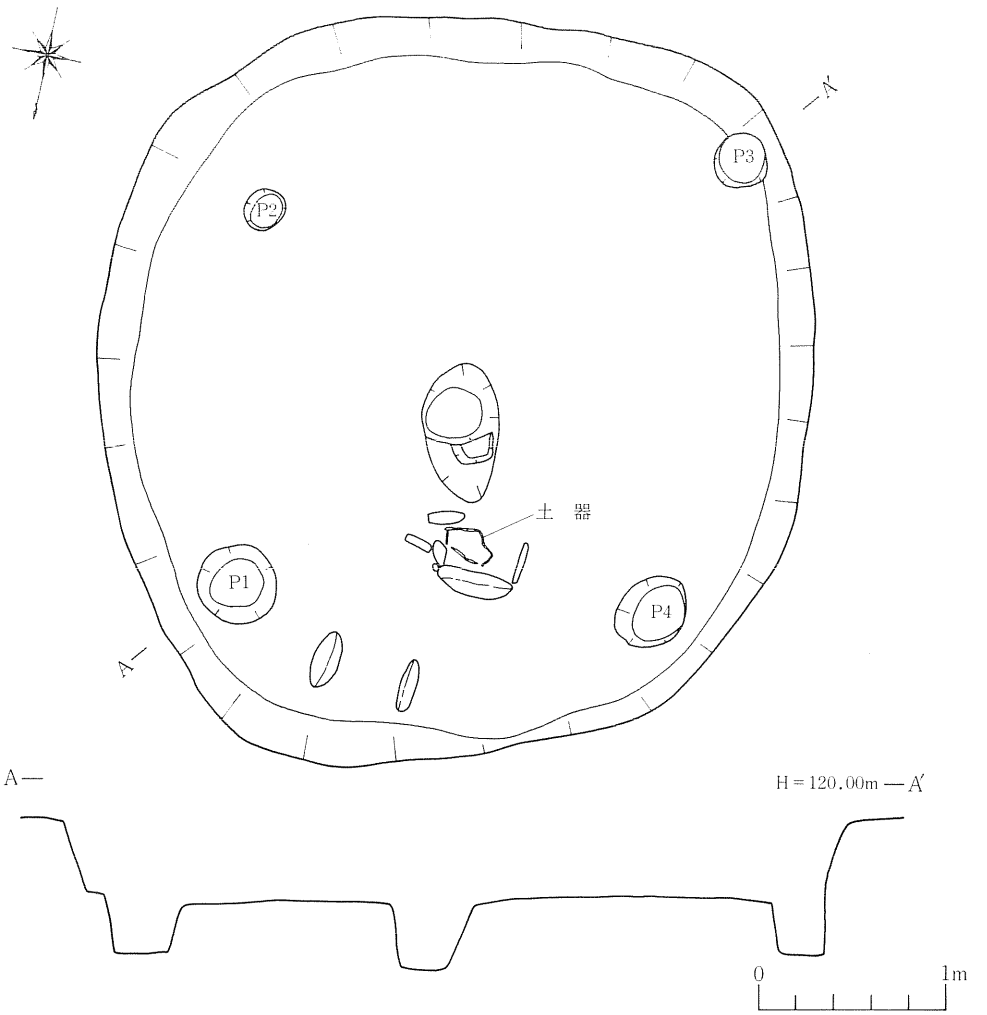
ＳＫ32に隣接し、ＳＩ02竪穴住居跡の床面に検出された。平面形は長軸96cm、短軸80cmの楕円形で、深さは54cmである。底面は平坦で壁はいくぶん丸みを帯びて立ち上がっている。ＳＩ02との新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ31（第16図）

Ｌ53グリッドに位置する。ＳＩ02竪穴住居跡と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は長軸118cm、短軸68cmの長楕円形で、深さ31cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上っている。ＳＩ02竪穴住居跡のP2が遺構中央部に穿たれている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ32（第16図）

Ｌ52グリッド内、ＳＩ02床面で検出したがＳＩ02に伴ったものか、新旧関係があるのか明確



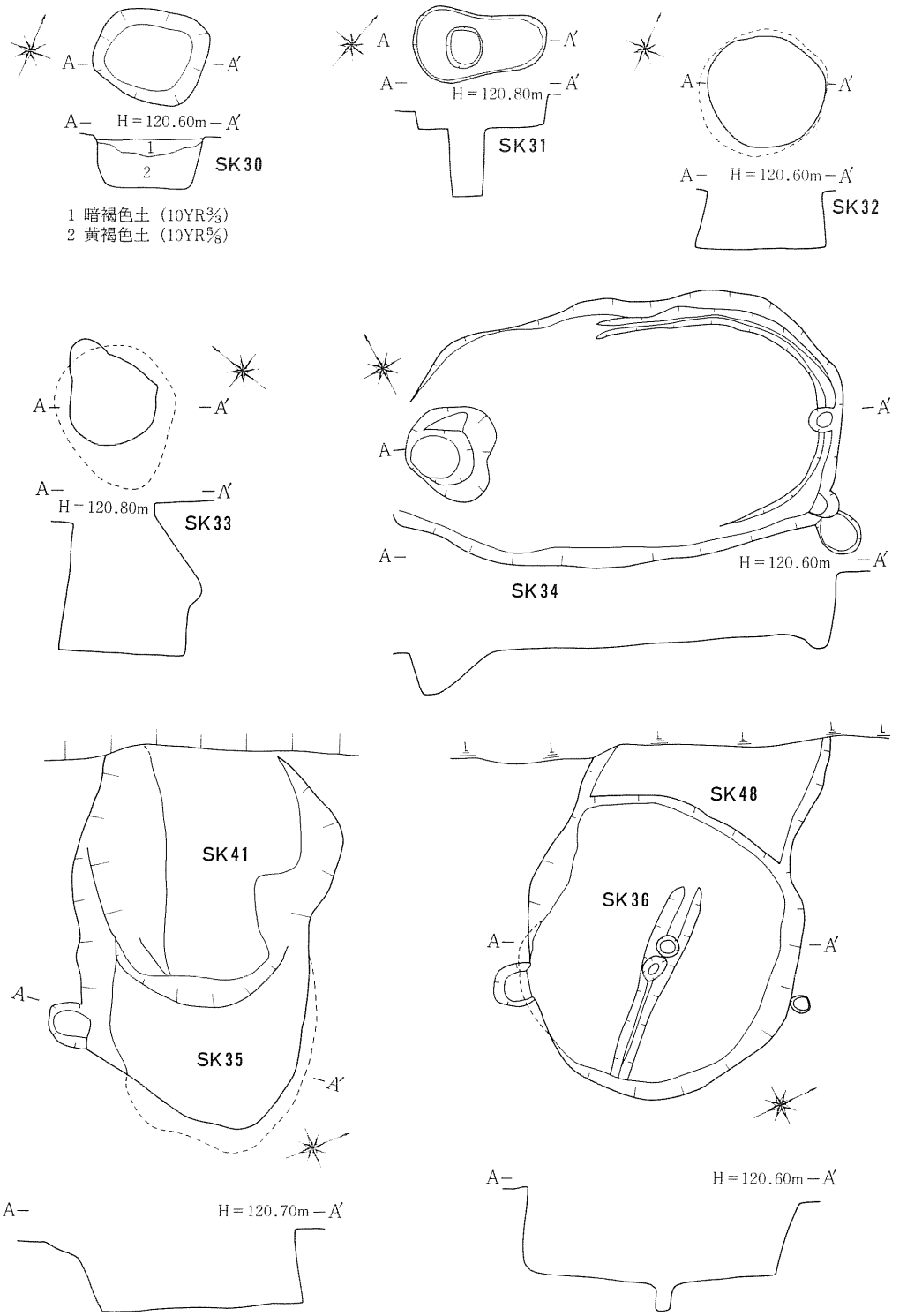
第15図　SI22竪穴住居跡

でない。平面形は円形で、開口部径103cm、底径114cm、深さ55cm、断面形は下方ほど広くなっている。底面は平坦で壁はほぼ直線的に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ33（第16図）

Ｌ51・52グリッドに位置し、ＳＩ02と重複しているが新旧関係は不明である。開口部の径は80cmであるが断面は下方に至って広くなるフラスコ状を呈し、底径は125cm、深さ130cmである。底面は平坦で、壁は中程に膨らむ部分があり、全体にややくずれたフラスコ状となっている。埋土は下方で黒褐色土と褐色土が互層となっていた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ34（第16図）



第16図　SK30～36・41・48土坑

Ｊ61･62、Ｋ61･62のグリッドにまたがって位置し、長軸4.0ｍ、短軸2.4ｍの楕円形を呈する。ＳＩ19と重複しているが、新旧関係は不明である。壁は西側を除き、高さ50～68cmの高さで垂直に近い立ち上がりを示すが、西側は斜面のため壁が残っていない。東半部に幅約20cm、深さ5～7cmの壁溝がある。底面は西に傾斜しており、東西両端では15cmほどの高低差がある。西端部に径85cm、深さ38cmのピットがある。本遺構に伴う土器は第20図11に示した１点のみである。円筒下層ｃ式またはｄ式であろう。石器は半円形扁平打製石器を主体とする15点が出土した。第23図５の左半が本遺構から出土したもので右半はＳＫ42土坑からの出土であるが両者が接合した。他に半円形扁平打製石器では完形のものが１点、半截されたものを接合して完形となるものが１点、半截品が７点、凹石の完形品１点、半截されたものが１点、磨石の完形品２点、石錘の完形品１点である。これらは覆土中からの出土で特にまとまって出土したというわけではない。

ＳＫ35（第16図）

Ｊ・Ｋ61グリッドに位置し、ＳＫ41と重複しているが、新旧関係は不明である。南北軸は2.1ｍあるが、東西方向に長軸を有するものと思われる。北から東側にかけての壁は下方ほど内側に入るフラスコ状で、高さ約70cmである。南側は外方に傾斜している。底面は西側にわずかに傾斜している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ36（第16図）

Ｊ・Ｋ61グリッドにまたがり、ＳＩ15、ＳＫ48と重複している。ＳＩ15よりは古い遺構と考えられるが、ＳＫ48との新旧関係は不明である。長軸2.7ｍ、短軸2.4ｍの楕円形で、西側を除いて62～93cmの高さの壁を有する。壁は南側の一部が内側に傾斜して下膨みとなっている他は外方に傾斜して立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。中央部に径16～25cm、深さ23cmほどのピットが２個あり、これを貫いて長さ1.84ｍ、幅18～32cm、深さ７～10cmの溝が通っている。遺物は円筒下層ｃ式と考えられる土器片が１点（第20図12）と、石錘1点である（第22図７）。

ＳＫ37（第17図）

Ｋ59グリッドに位置し、ＳＩ16と重複するが、本遺構の方が古いと考えられる。西側は土取りによって破壊されているが最大径3.45ｍを有する。壁は63～74cmの高さで、北側が著しく外方に傾斜している。底面はほぼ平坦で、中央部に径28cm、深さ38cmのピットが見られる。遺物は覆土中から土器片のみポリ袋１袋が出土した。円筒下層ｃ式またはｄ式であろうか。

ＳＫ38（第17図，図版６）

Ｋ58グリッドに位置し、ＳＩ16と重複するがこれよりも古い時期の遺構である。長軸3.30ｍ、短軸2.75ｍの楕円形で、壁は東側がほぼ垂直に立ち上がり、約60cmの高さを有するが、西ほど低くなり、西端では約25cmとなる。底面はほぼ平坦である。中央部に径18cm、深さ18cmの円形

のピット、西端部に長軸65㎝、短軸46㎝、深さ24㎝の楕円形のピットがある。他に２個のピットがあるが本土坑に伴うものではないと考えられる。中央部ピットを取り囲む位置と、その東に離れて炭化物が分布している。各々長軸62㎝、短軸30㎝、長軸40㎝、短軸34㎝の範囲で分布し、焼土は見られない。遺物は出土しなかった。

ＳＫ39（第17図，図版６）

Ｋ57グリッドに位置し、ＳＩ12よりは古いと考えられる遺構である。平面形は長軸4.20ｍ、短軸2.84ｍの楕円形で、壁は全体に外方に傾斜しており、東西両端では27㎝ほどの高低差がある。底面中央部に径25㎝、深さ27㎝のピットがあり、西端部にはこれより大きな長軸54㎝、短軸40㎝のピットがある。中央部ピットのすぐ北側と東側に焼土を少し含む炭化物がそれぞれ長軸63㎝、短軸43㎝、長軸40㎝、短軸35㎝の範囲で分布している。遺物はポリ袋１袋が出土した。土器は円筒下層式と思われるが詳細は不明である。磨製石斧１点（第22図４）も出土した。

ＳＫ40（第12図，図版７）

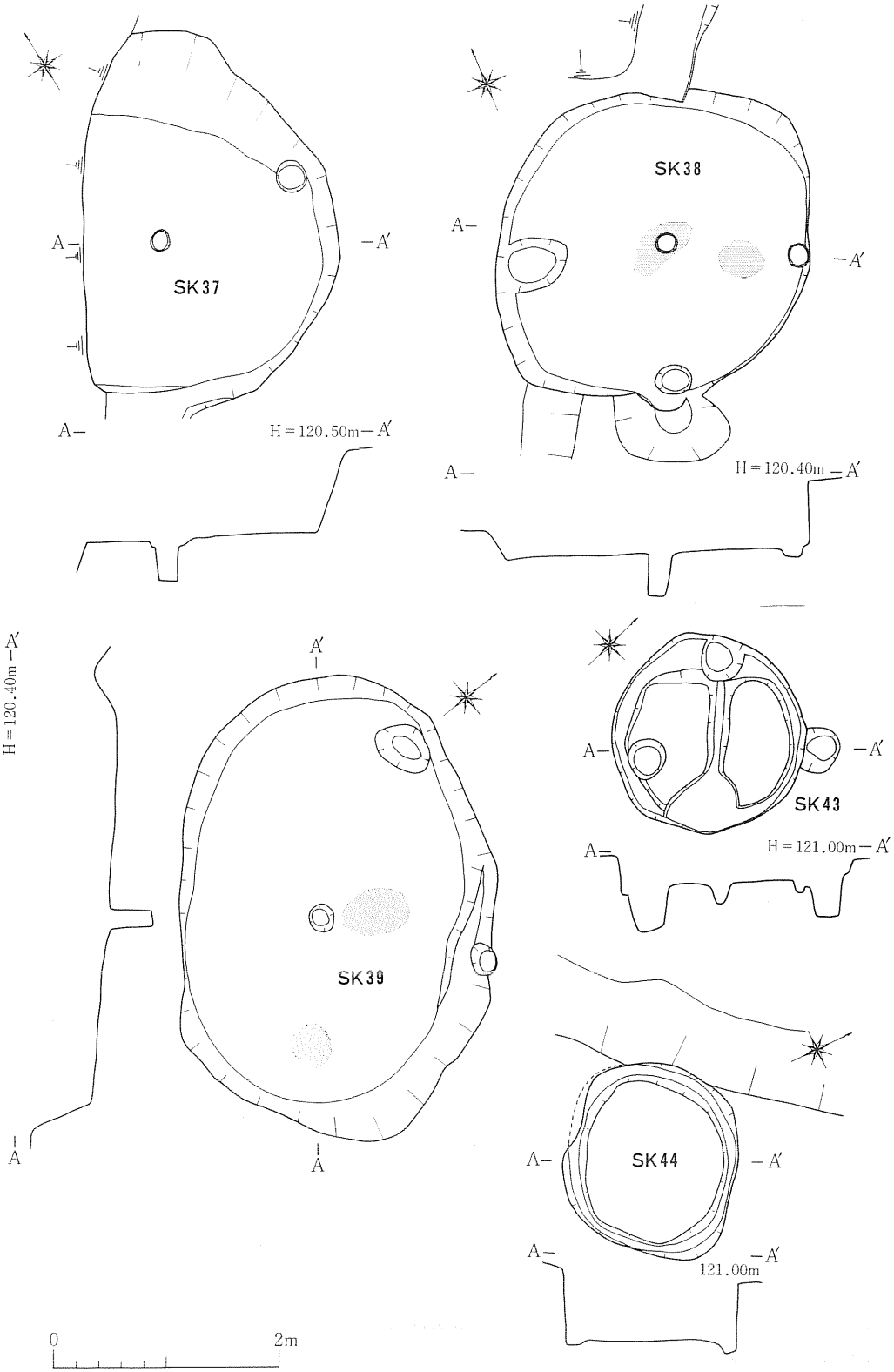
Ｋ56グリッドに位置し、ＳＩ18竪穴住居跡の床面下に検出された。平面形は長軸2.16ｍ、短軸1.85ｍの楕円形を呈し、深さ77㎝である。壁は西側から北側にかけてやや傾斜しているが、他は垂直に立ち上がっている。幅12～30㎝、深さ８㎝ほどの壁溝が全体にめぐっている。底面は平坦で、中央部に径25㎝、深さ16㎝、西端部に長軸50㎝、短軸36㎝、深さ24㎝のピットがある。遺物は完形土器が遺構底面に逆位に置かれた状態で出土した。口径22.6㎝、器高33.5㎝で、口縁部外面が肥厚し、全体に縄文が施文されているが、土器型式は詳らかではない（第19図５）。

ＳＫ41（第16図）

Ｋ61グリッドに位置し、ＳＫ35と重複するが新旧関係は不明である。西側は斜面であるため崩落して失われているが、南北2.7ｍ、東西2.3ｍを測る。壁は35ｍ～50ｍの高さで外方にゆるやかに傾斜して立ち上がる。底面は西ほど低くなっている。本遺構からは土器は出土しなかったが、石器８点が出土した。第23図６は半截された半円形扁平打製石器であるが接合すると完形品となるもので、同様のものがもう１点、半截品が３点ある。磨石も完形品が１点、接合して完形品となるものが１点あり、他に凹石の完形品が１点である。

ＳＫ42（第18図，図版７）

Ｉ62･63、Ｊ62･63グリッドにまたがって位置する。東端が調査範囲外に入り、西端はＳＫ45と重複しているが、長軸推定4.0ｍ、短軸2.6ｍの楕円形を呈するものと考えられる。壁は33～75㎝の高さで、南西部を除いてほぼ垂直な立ち上がりである。幅15～20㎝、深さ８㎝の壁溝がめぐっている。底面は平坦で、中央部に径28㎝、深さ17㎝、その西に径50㎝、深さ33㎝のピットがある。本遺構からは土器は出土しなかったが半円形扁平打製石器が14点出土した。第23図５の右が本遺構から出土したもので、ＳＫ34出土の同種石器と接合した。他に完形品が２点、



第17図　SK37～39・43・44土坑

接合すると完形となるものが２点、半截されたものが８点である。これらはＳＫ34の場合と同様に覆土中からの出土で、特にまとまった状況ではなかった。

ＳＫ43（第17図）

Ｊ63･64、Ｋ63･64グリッドに位置する。平面形は長軸1.80ｍ、短軸1.73ｍの略円形を呈し、壁は18～28㎝の高さでほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおよそ平坦である。底面に３個、土坑北壁に接して１個のピットがあり、その径は38～70㎝、深さ17～61㎝である。東・西のピットを結ぶように幅約20㎝、深さ10㎝の溝がある。遺物は出土しなかった。

ＳＫ44（第17図）

Ｊ64・Ｋ64グリッドにまたがって平面形は長軸1.85ｍ、短軸1.65ｍの略円形で、壁は高さ40～72㎝でほぼ垂直に立ち上がる。幅10～26㎝、深さ２～11㎝の壁溝がめぐっている。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ45（第18図，図版７）

Ｊ63グリッドに位置する。ＳＫ42と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は長軸2.76ｍ、短軸2.35ｍの楕円形を呈し、壁は北東部では67～86㎝の高さであるが、他は24～41㎝で外方にわずかに傾斜して立ち上がる。底面は平坦で中央部に径20㎝、深さ25㎝、西端部に径47㎝、深さ20㎝のピットがある。遺物は出土しなかった。

ＳＫ46（第18図）

Ｊ62グリッドに位置し、長軸1.50ｍ、短軸1.30ｍの略円形を呈する。壁は東側は約60㎝の高さを有するが西ほど低くなり、西側は10～20㎝の高さにすぎない。全体に垂直に近い立ち上がりである。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ47（第18図）

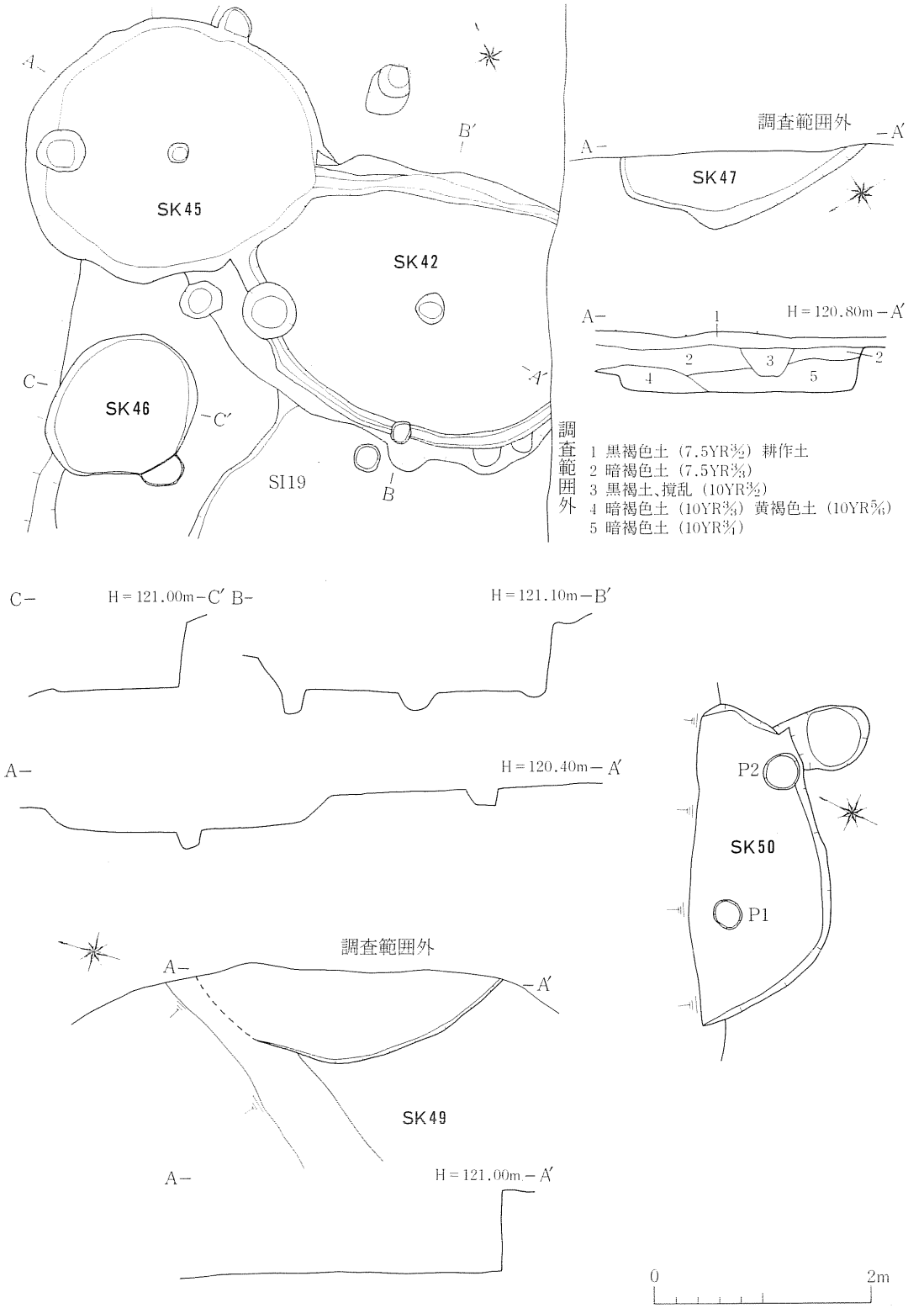
Ｊ47･48グリッドに位置し、大半は調査範囲外に入っているので全容は不明である。耕作による破壊も受けている。壁は高さ34～45㎝で垂直に近い立ち上がりである。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ48（第16図）

Ｋ60グリッド内にあり、ＳＫ36と重複するが新旧関係は不明である。西側は土取り工事によって切られており、全容は不明であるが、北側壁は長さ1.2ｍ、高さ14～37㎝、南側壁は長さ0.5ｍ、高さ35㎝で、わずかに外方に傾斜して立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ49（第18図）

Ｊ65・Ｋ65グリッドに位置し、大部分は調査範囲外に入っており、西端部は斜面のため失われている。平面形は楕円形と思われるが、規模は不明である。壁は南東部で高さ72㎝あり、西



第18図　SK42・45～47・49・50土坑

ほど低くなっているが、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。遺物は土器片がごく少量出土した。土器型式は円筒下層ｃ式またはｄ式であろう。

ＳＫ50（第18図）

Ｌ・Ｍ53グリッドに位置する。大部分が道路造成によって既に破壊されており、全容は不明であるが、おおよそ北西～南東方向に長軸を有する楕円形を呈していたものらしい。壁は高さ22～26cmで垂直に近い立ち上がりを示す。底面は平坦であるが、竪穴住居跡の床面のように堅くはない。底面にＰ1・Ｐ2がありそれぞれ径28cm、深さ57cm、径35cm、深さ49cmであるが、これらは本土坑に伴うものとは断じ難い。ＳＩ03竪穴住居跡を切っている。

第２節　遺構外の出土遺物

（１）土　器（第20図13～15，第21図1･2）

第20図13はキャリパー状の口縁部で、縄文の他、粘土紐貼付による文様を描く。14はほぼ直立する口縁部で粘土紐による曲線文、直線文の他、横位の沈線文も施されている。15は外反する胴上部で太い粘土紐貼付文の中に刺突文が並列している。第21図１は胴部で、斜縄文の上に沈線による文様を描く。２はやや外傾する口縁部で、口唇部にも縄文を施し、その下位には横走する３条単位の沈線文が見られる。

（２）石　器（第21図10・11，第22図６）

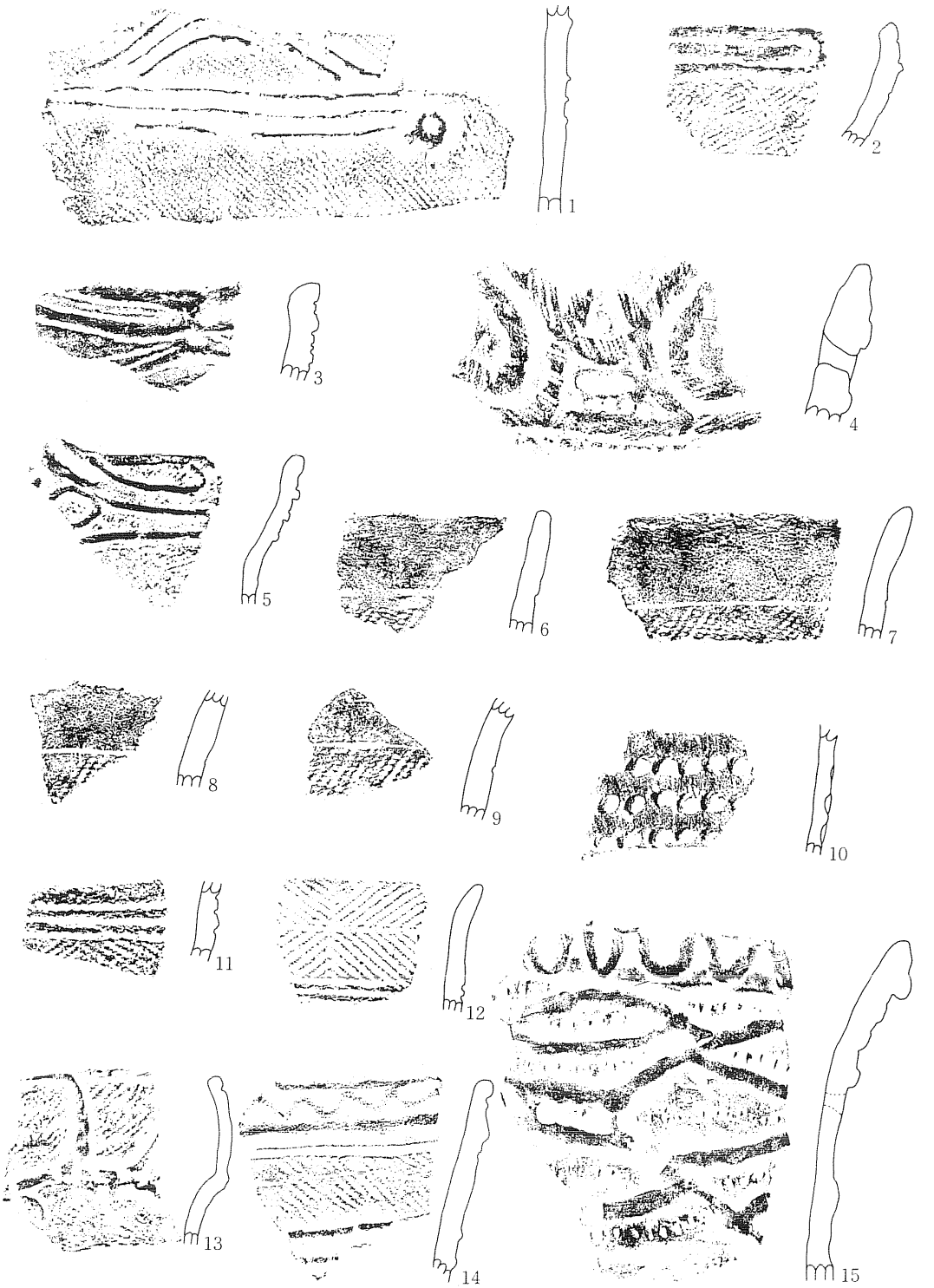
第21図10は縦形石匙、11は横形石匙である。第22図６は磨製石斧である。

（３）天然アスファルト

Ｎ50グリッド内の１層より天然アスファルトの小塊が出土した。

1・2：SI01　　3：SI02
4：SI22　　5：SK40

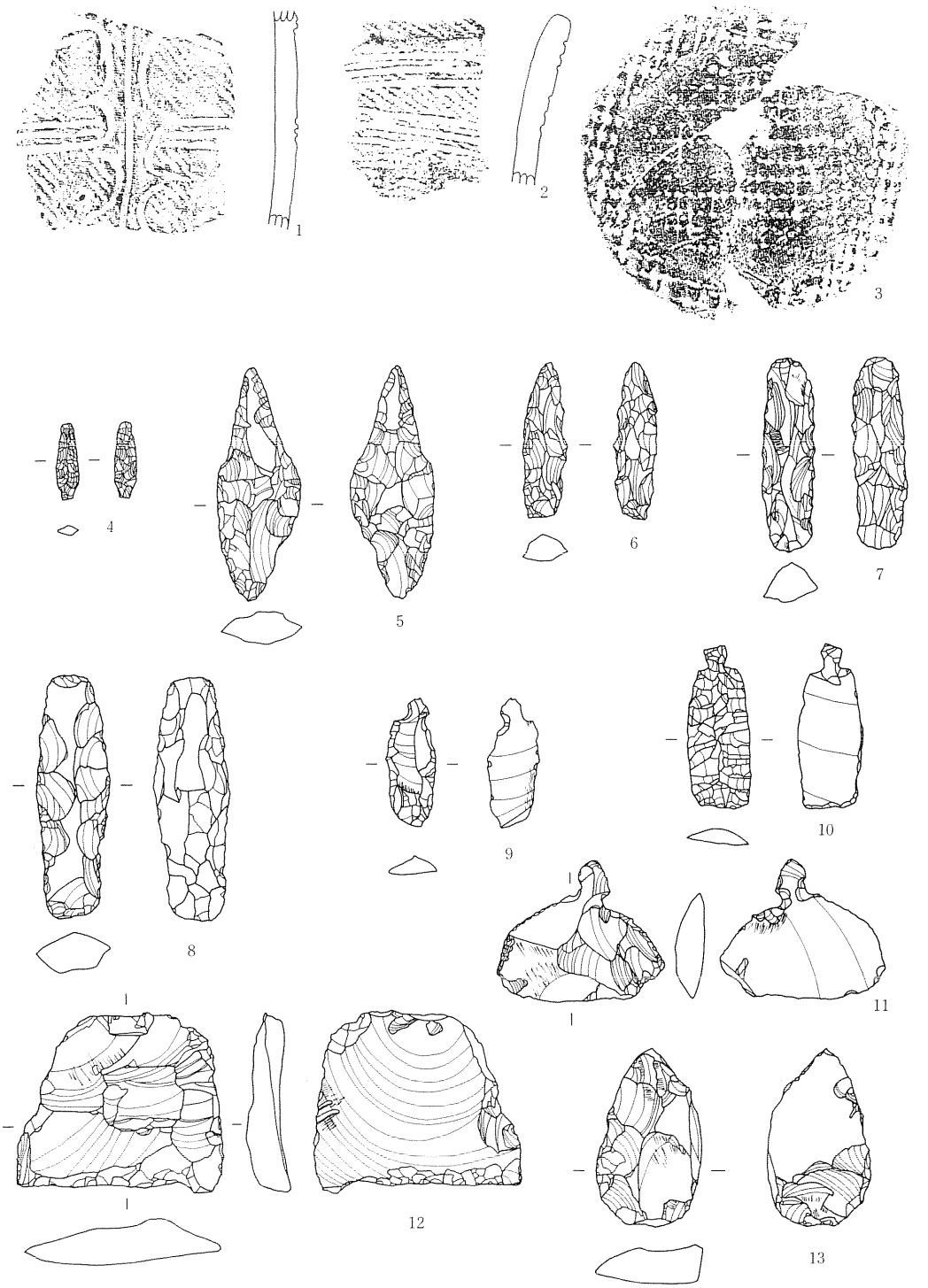
第19図　遺　　物(1)



1：SI06　2～4：SI12　5：SI13
6～10：SI22　11：SK34　12：SK36
13～15：遺構外

0　10cm

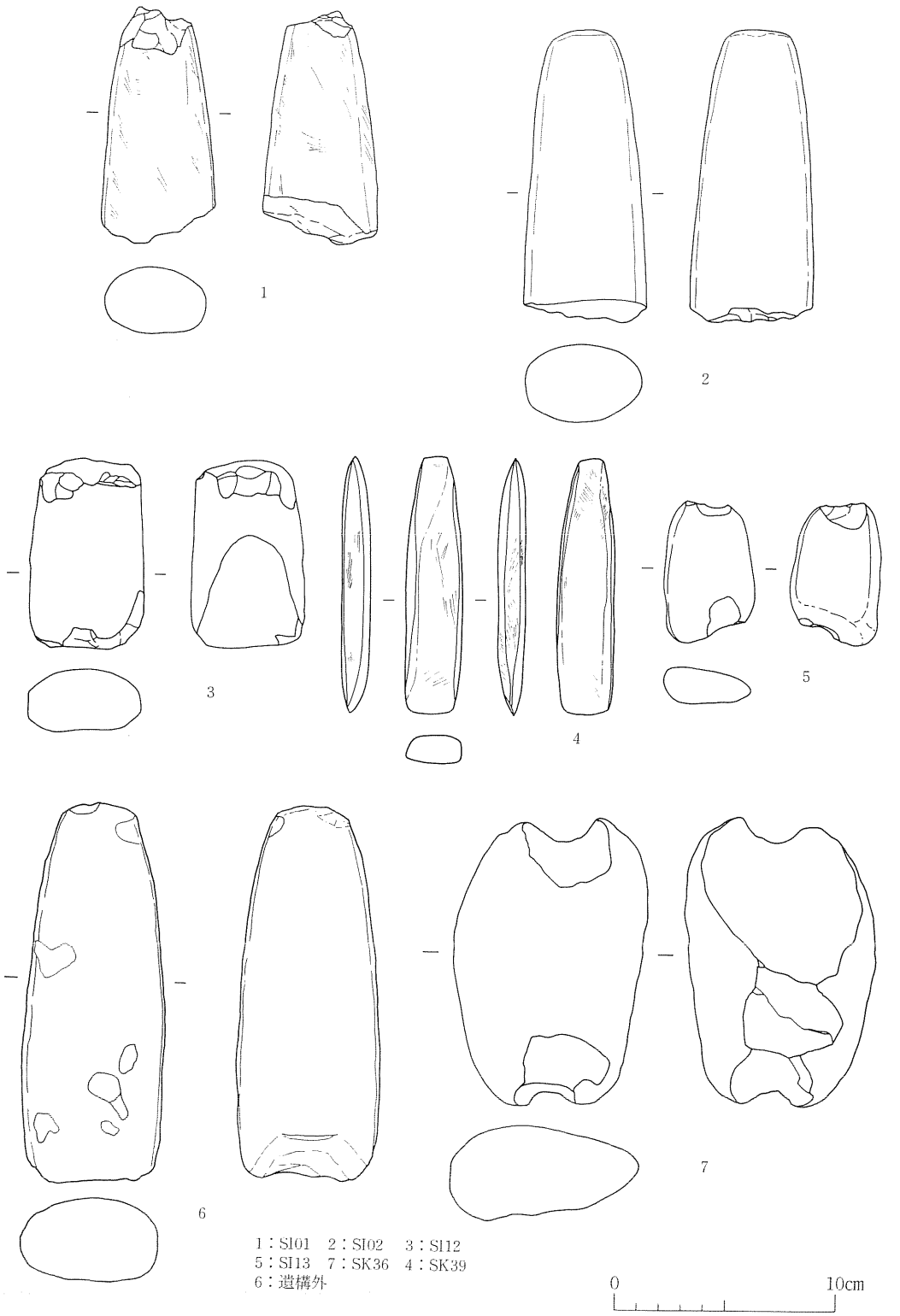
第20図　遺　　物(2)



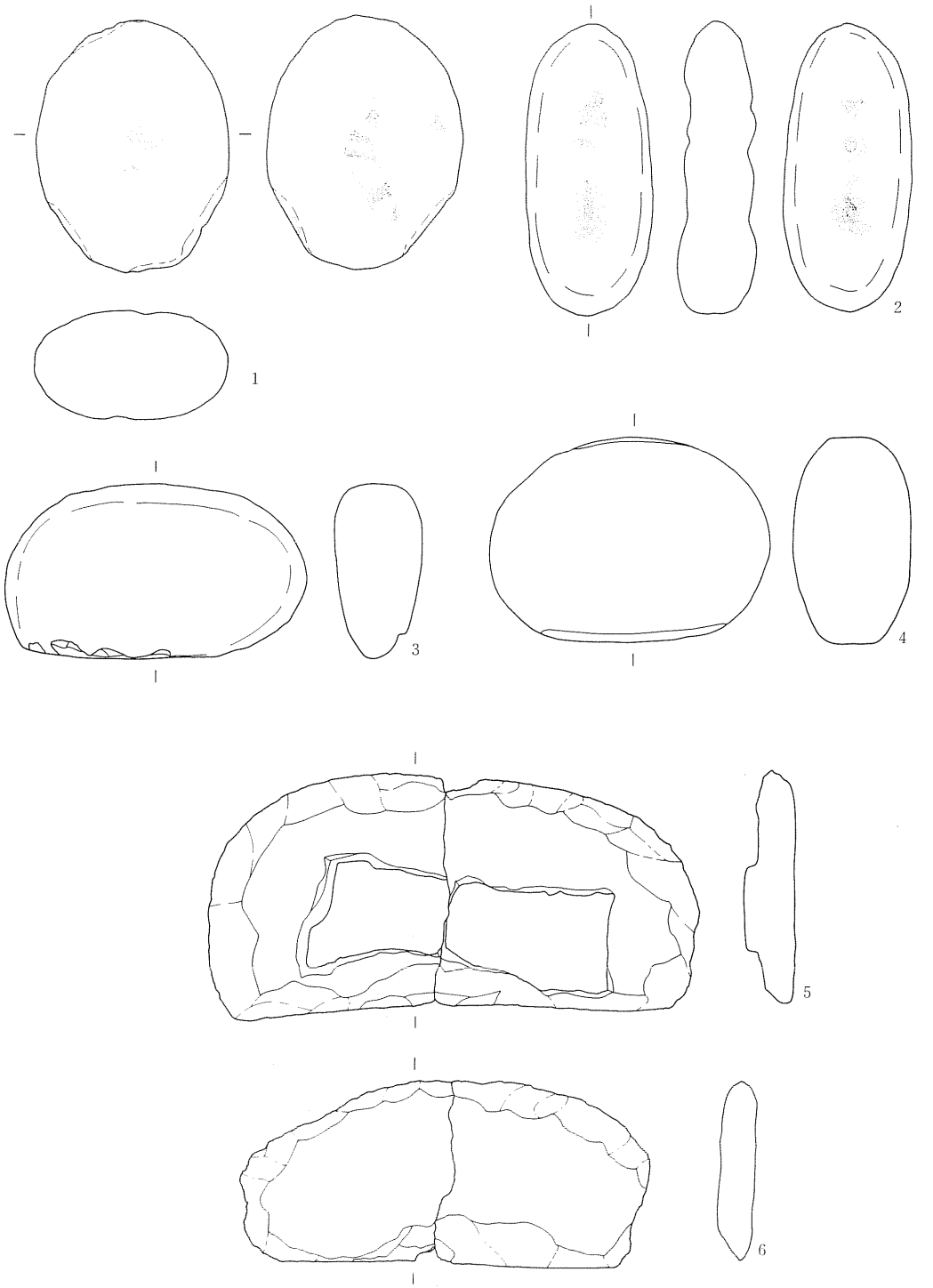
7：SI02　　9･13：SI03
4.5：SI12　　3･6･8：SI14
12：SI16　1･2･10･11：遺構外

0　10cm

第21図　遺　　物(3)



第22図　遺　　物(4)



1：SI02　3：SI12　2･4：SI14
5：左SK34　右SK42
6：SK41

第23図　遺　　物(5)

第５章　自然科学的分析

第１節　放射性炭素年代測定

ＳＫ38土坑とＳＩ11竪穴住居跡から検出された炭化物の放射性炭素年代測定を学習院大学に依頼したので、その結果を以下に記す。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1989年１月18日

秋田県埋蔵文化財センター殿

1988年12月20日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には、^{14}Ｃの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が２σ以下のときは、３σに相当する年代を下限の年代値（B.P.）と表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が２σ以下のときには、Modernと表示し、δ ^{14}Ｃ％を付記してあります。

記

Code NO.	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK-14159	Charred wood from 阿仁町 2UD・I　SK38	4250 ± 110 2300 B.C.
GaK-14160	Charred wood from 阿仁町 2UD・I　SI11	4240 ± 120 2290 B.C.

学習院大学　　木越　邦彦

第6章　ま　と　め

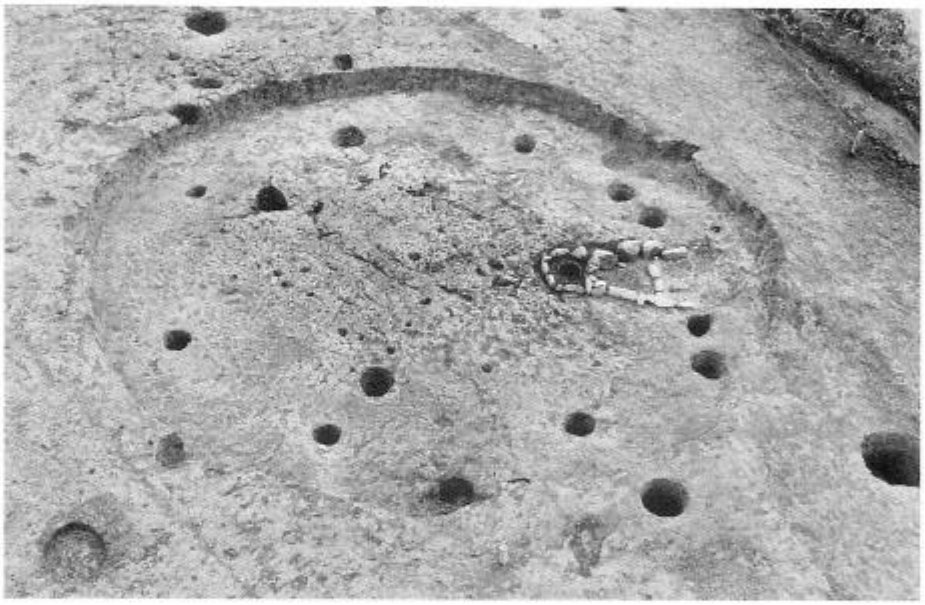
本調査では竪穴住居跡、土坑が密集、重複する状態で検出された。前述のように遺跡は河岸段丘の平坦面に占地したもので、遺構の状況から調査範囲外にも数十ないしは100軒に及ぶかと推定される竪穴住居跡や各種遺構の存在が予想される。

土坑は長径２ｍをこえる大型のものが多く、底面に壁溝を設け、中央部に柱穴を有し、段丘の縁辺部に列状に配列されていることから、その大部分は屋外の貯蔵穴としての機能が推定される。これら大型の土坑は縄文時代前期が主体と考えられるが、竪穴住居跡は中期中葉から末葉の構築で前期のものはなく、縄文時代前期に属する住居は調査範囲外の東～北東側に存在が推定される。

出土した土器や、半円状扁平打製石斧、複式炉などからは、本遺跡が米代川水系に属しながらもその南部に位置することから、円筒土器文化圏、大木式土器文化圏の両要素を受け入れていることがうかがわれる。

図版一　遺跡

1　調査前の状況（北から）

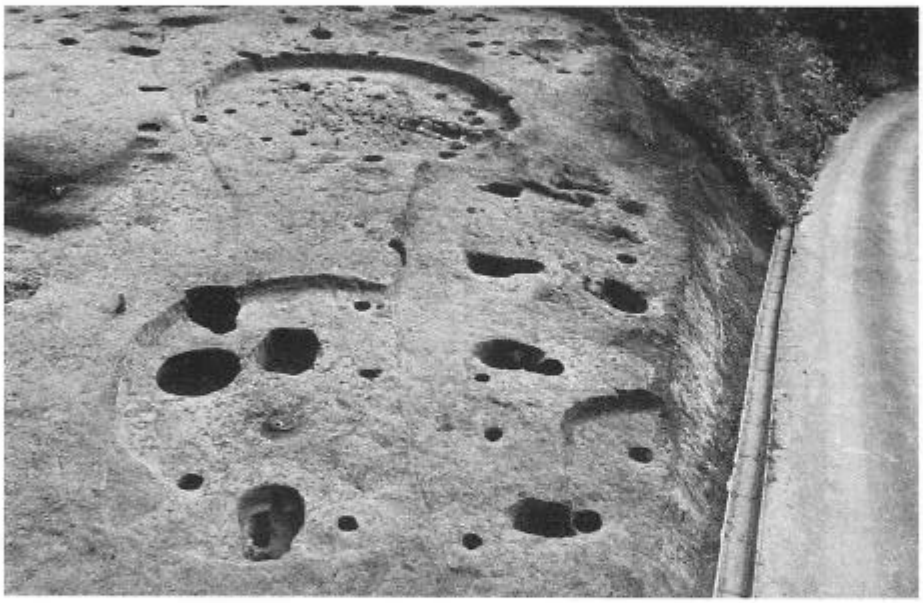


2　SI01竪穴住居跡
（北東から）

3　SI01複式炉（西から）

図版二　遺　跡

1　SI01複式炉埋設土器
（北から）



2　SI01・02・03竪穴住居跡
（北東から）

3　SI02炉埋設土器
（南西から）

図版三　遺跡

1　SI03竪穴住居跡
（南西から）

2　調査区南部（北から）

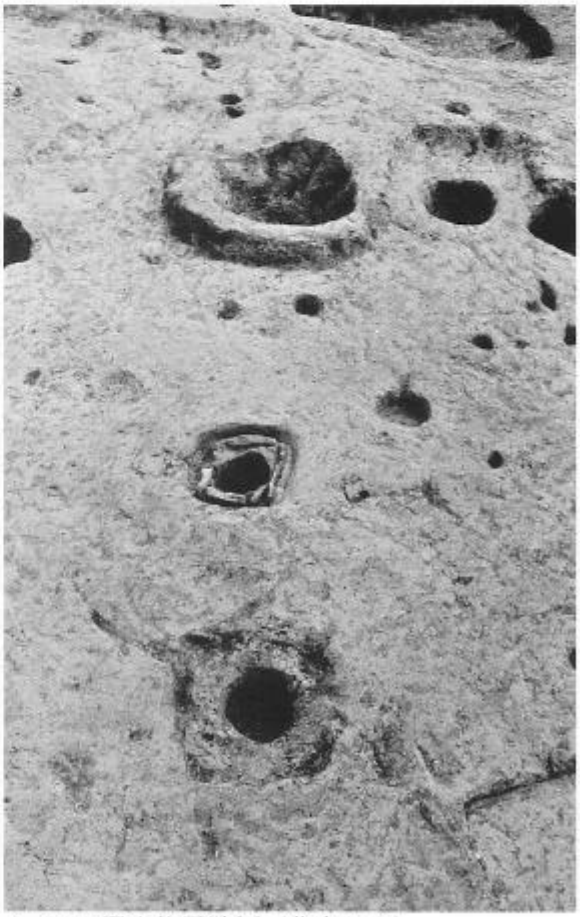
3　調査区北部（南西から）

図版四　遺跡

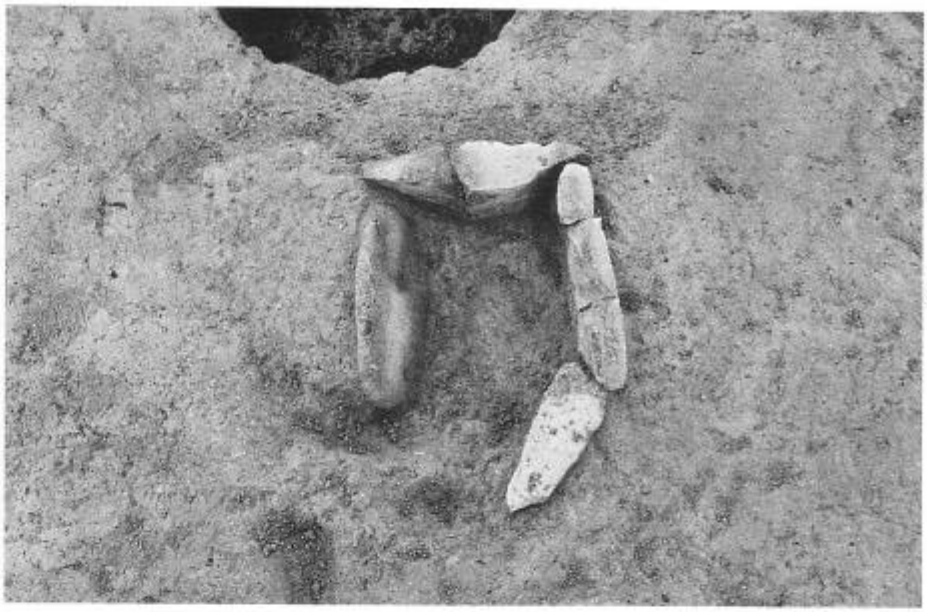
1　調査区北部（南から）

2　調査区北部（北から）

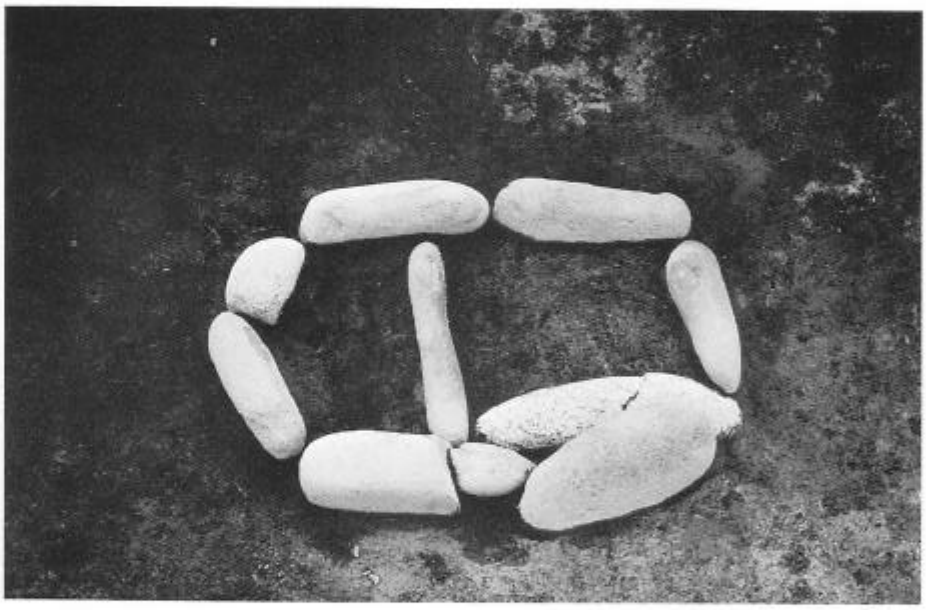
3　SI14竪穴住居跡（南から）



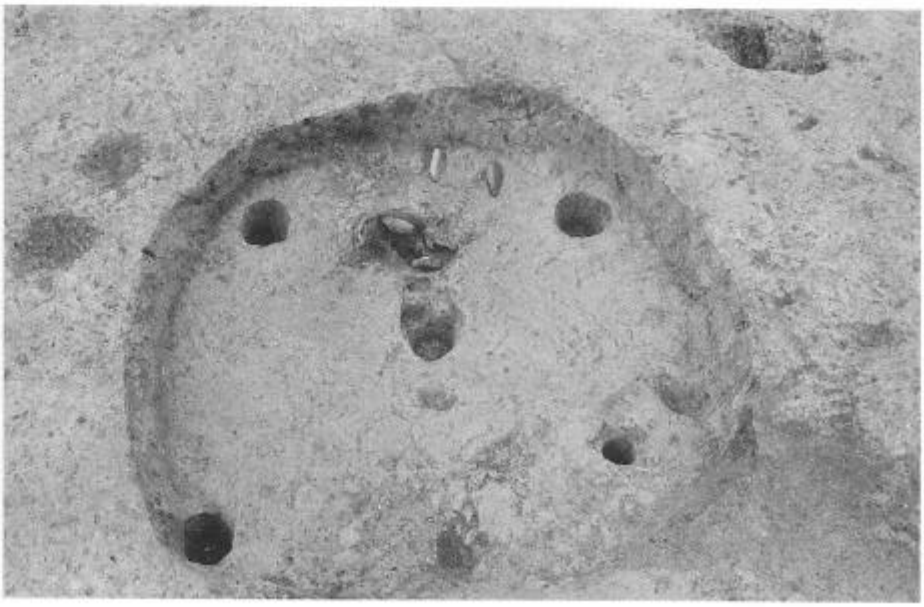
4　SI14竪穴住居跡炉（北東から）



1　SI13竪穴住居跡石囲炉
（南から）



2　SI18竪穴住居跡石囲炉
（南東から）

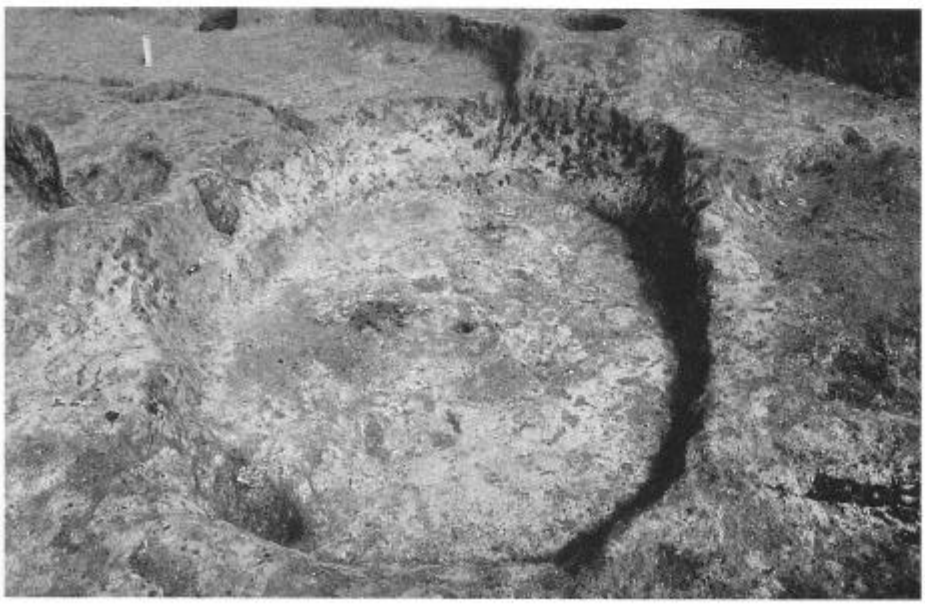


3　SI22竪穴住居跡
（南から）

図版六　遺　跡

1　SI01・06・22竪穴住居跡（東から）

2　SK38土坑（西から）



3　SK39土坑（北西から）

図版七　遺　跡

1　SK40土坑（北西から）

2　SK42・45土坑
（北西から）

3　調査風景

図版八　遺　物

1

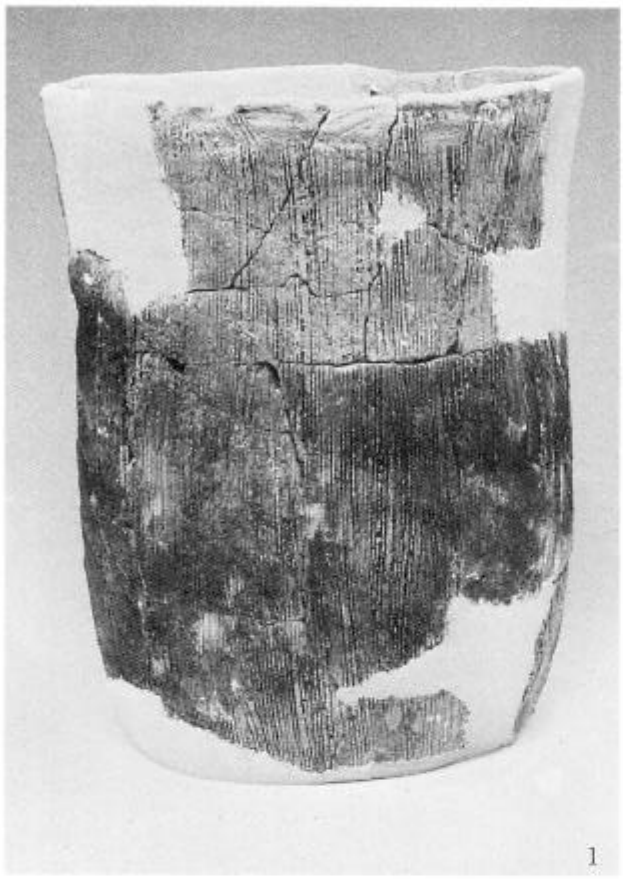
2

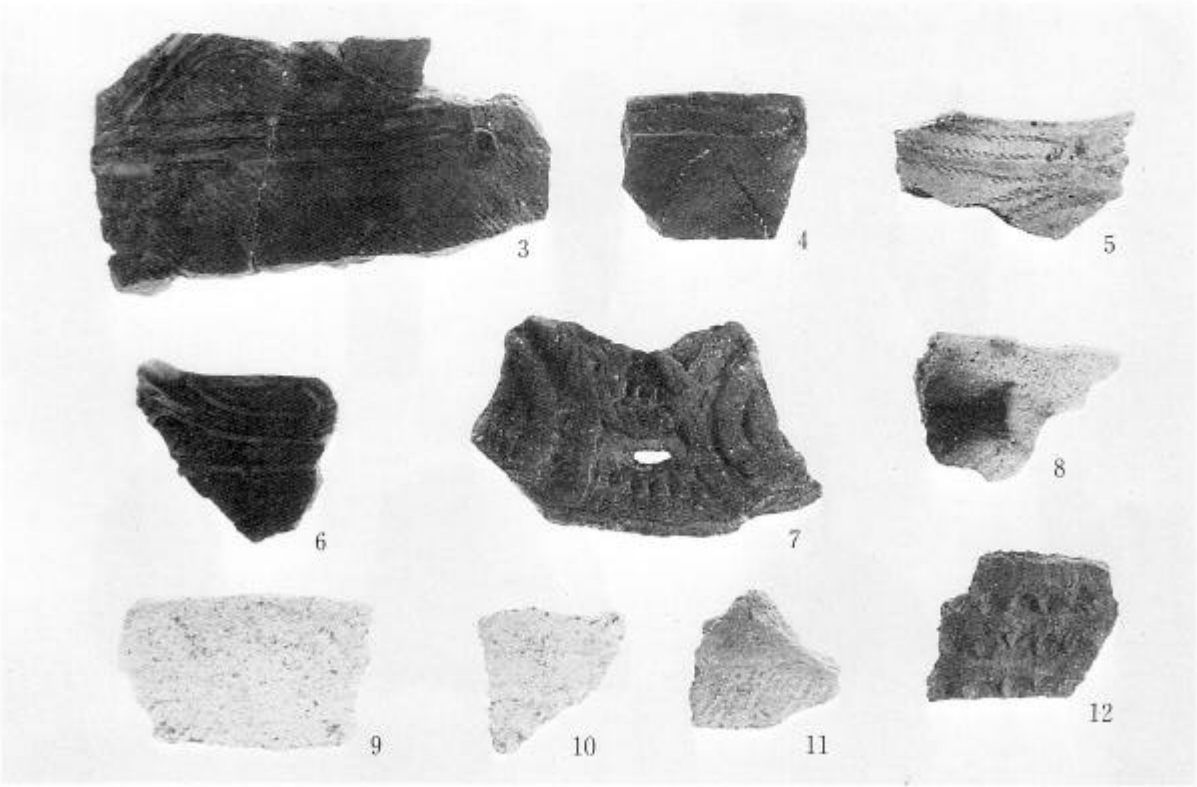
3

4

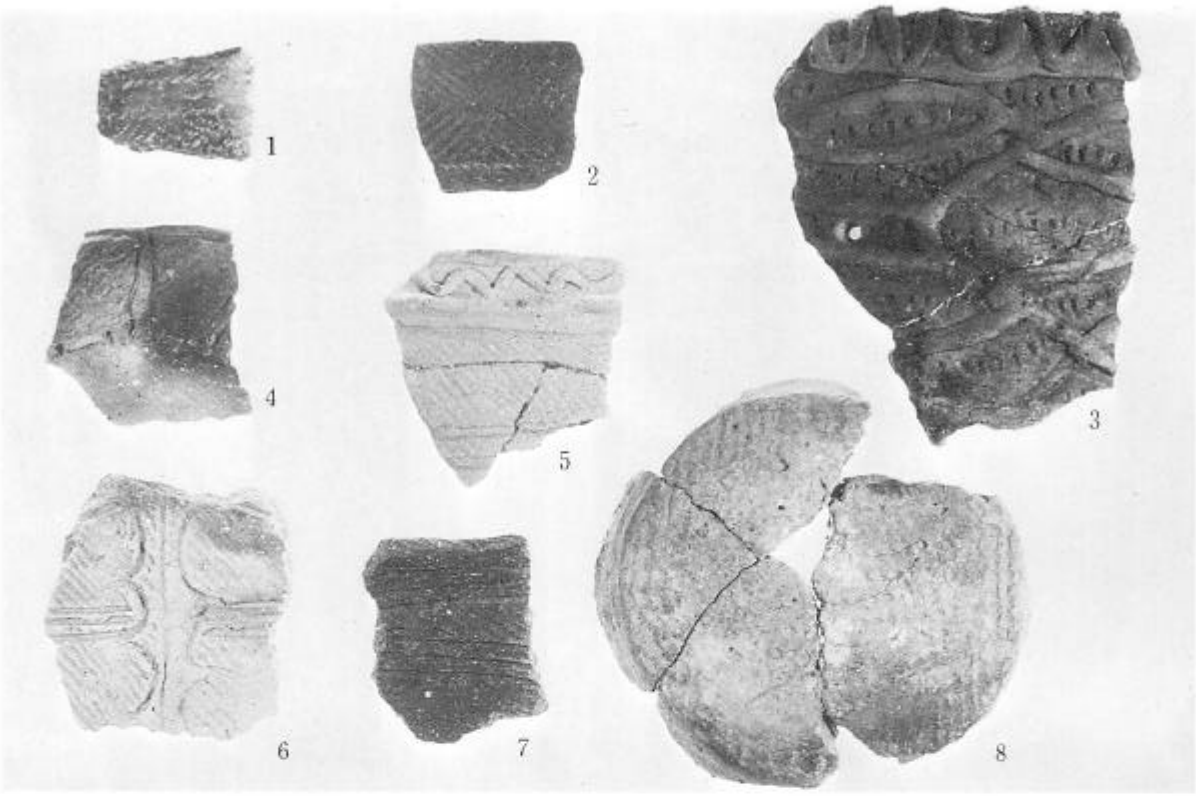
5

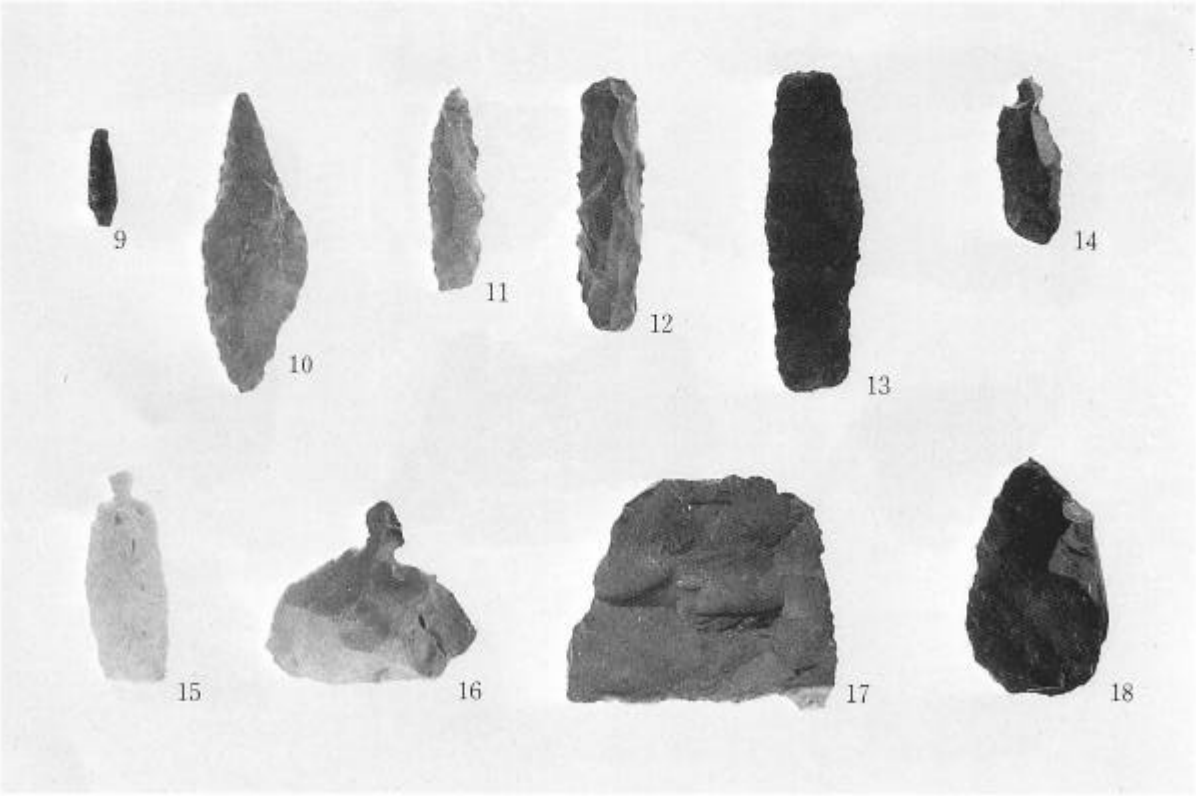
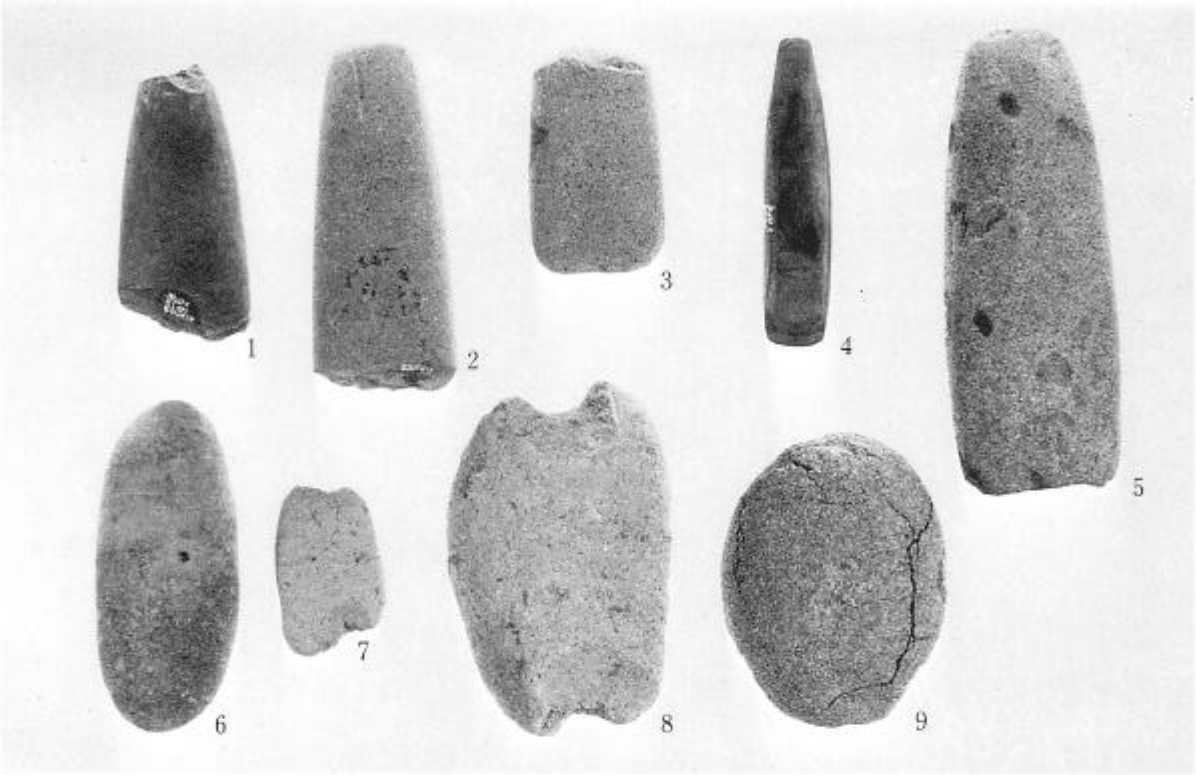
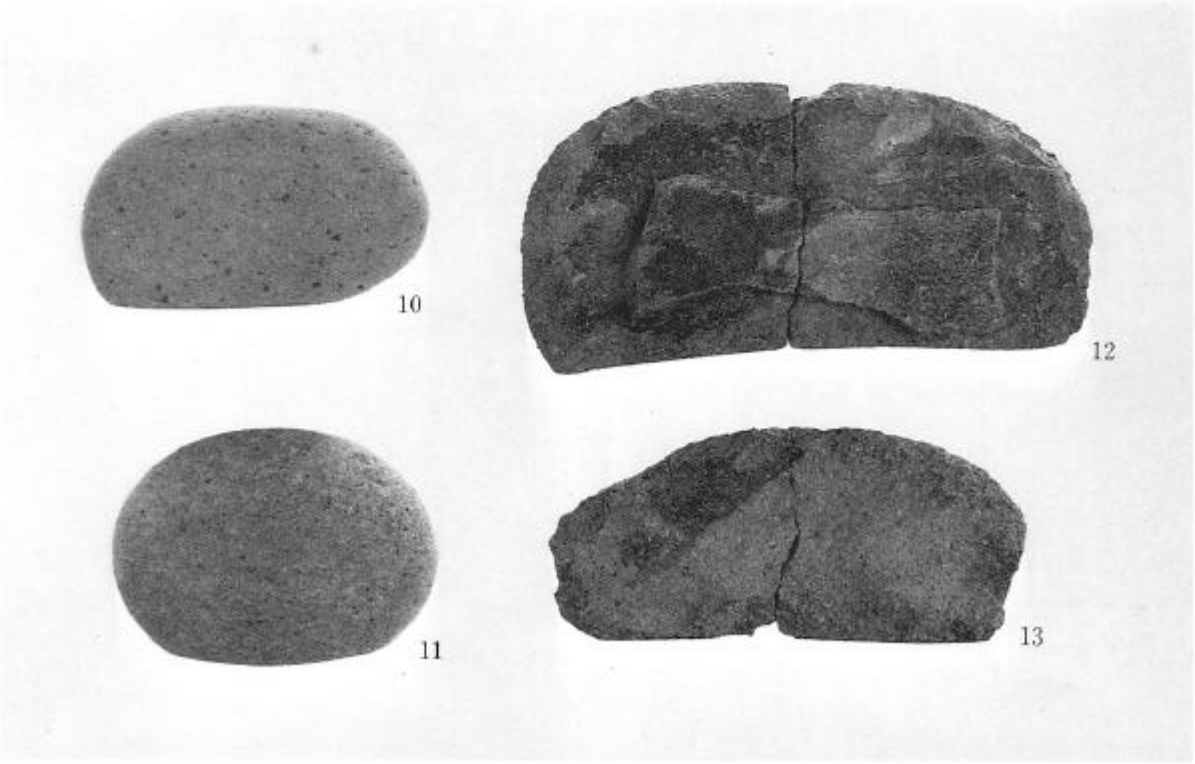
図版九　遺　物





図版十　遺　物





図版十一　遺　物